



## 本事業の趣旨・目的

日本における障がいのある方の芸術分野での社会進出は、近年目を見張るものがある。鳥の劇場は、2013年より障がいのある方とない方が一緒に演劇を作る「じゆう劇場」のプロデュースを始めた。その活動を通じて、社会的壁を越えようと弛まぬ努力を続けている多くの障がいのある方々、障がいのある方々と共に歩んでこられた多くの先達たちの活躍を知り、障がいの壁を超えた創作の可能性の豊かさを知った。

鳥の劇場は、演劇活動を主とする劇団であり劇場で、毎年国際フェスティバルも開催し、海外とのつながりもある。「じゆう劇場」の活動を行う中で、演劇での取り組み、加えて海外の芸術家との共同作業はまだ少ないことも認識した。演劇と障がいの関係を深める実践は、鳥の劇場の蓄積や取り巻く環境を利用して開拓すべき分野であると考え本事業を立案した。

本事業は、鳥の劇場と協定を交わしている韓国総合芸術総合学校との共同事業の形で実施することとした。日韓の演劇人や劇場・大学との関わりの中で、障がい者による演劇活動の新たな可能性を示すとともに、多くの観客や関係者の巻き込み、それを通じた対話や日韓両国の障がい者との共生の歴史の振り返りなどを踏まえ、東アジアにおける21世紀型共生モデルの提示と発信を目指す。

また、違う文化・歴史を持つ両国の障がい者が共同で作品創作をする中で、それぞれの国での障がい者に対する周辺環境・文化芸術に関わるための仕組みづくりなどを比較・検証し、日韓双方の課題点、学ぶべき点を発見していく。

### 2020年度のスタッフ・俳優について

日韓から一人ずつ演出家を立て、脚本を韓国の作家に依頼。

- ・日本側の演出家にはもりながまこと氏を起用。奈良で活動している演出家で、2000年ごろより障がい者との演劇創作を模索し、現在は劇団くらっぷ(知的障がいのある方たちが役者をしている劇団)の演出をしながら、精神障がい者や高齢者介護の現場に従事している。
- ・韓国側の演出家は、韓国芸術総合学校演劇院演出科専門士課程に在籍しているチョン・ソンギョン。劇団スペースモンキーの主宰で、韓国国内の演劇賞H-Star Festival演劇部門で金賞を受賞、ソウル文化財団の支援を受けている気鋭の演出家。
- ・脚本は、韓国のイ・ヨンジュ。2010～2015年にかけて、韓国の障がい者の劇団「エイン」で演出家として活動し、その後も共同で作品を創作している。
- ・日本側の俳優は公募を考えていたが、コロナ禍のため事業所単位での公募に変更し、社会福祉法人わたぼうしの会たんぼぼの家(奈良県)に決定した。
- ・韓国側の俳優は公募によって集めた。

若い世代の共同を鳥の劇場と韓国芸術総合学校がサポートし、次年度以降、前年までの成果を踏まえながら事業の担い手を適切に配置していく。

本事業は2018年に締結された韓国芸術総合学校と鳥の劇場の協定に基づき実施する。両国が直面する分断(他者への優しさの喪失)という社会課題への、演劇を通じての創造的取り組みの実施、その効果の検証、それを踏まえた新しい取り組みの実施という形で、PDCAの循環によりながら、東アジアモデルの共生社会の実現に向けて事業を継続していく。

### 1年目

2013年から障がいのある人との取り組みを実施している鳥の劇場と、韓国ナンバーワンの国立芸術大学・韓国芸術総合学校のそれぞれの蓄積、強みを生かし、両国の才能のある若い演劇人と両国の障がいのある人の共同による作品創作を実施し、鳥取とソウルで上演する。事業の成果を検証する。

### 2年目

初年度の成果を踏まえ作品を再創作(新作とするか、再演とするか要検討)し、日韓の会場で上演する。上演参加者、観客も巻き込みながら、事業の今後の可能性や課題を検討する。

### 3年目 ～ 5年目

2年目までの成果をもとに、日韓の輪を広げ、東アジア諸国の参加も促すような形にしていく。併せて、日韓両国が歴史的に障がいのある人とともにどのように社会を築いてきたのかの学び合いの場を作る。

### 5年目の 目標

演劇を通じて楽しみ、助け合い、それぞれの才能を讃え合い、「共に生きる」ことの喜びを実感できるような場や関係の東アジアモデルを世界に発信する。Society5.0とも称される我が国の社会状況の中で、本事業の取り組みの先見性・公益性を広く周知する。

## 目次

03P	ご挨拶	09P	作品創作過程
05P	事業実施スケジュール	23P	作品創作に関わったスタッフ・キャスト
06P	公演実施概要	27P	出演メンバー座談会
07P	作品内容	29P	観た人の感想

## ご挨拶

日本側オーガナイザー：鳥の劇場

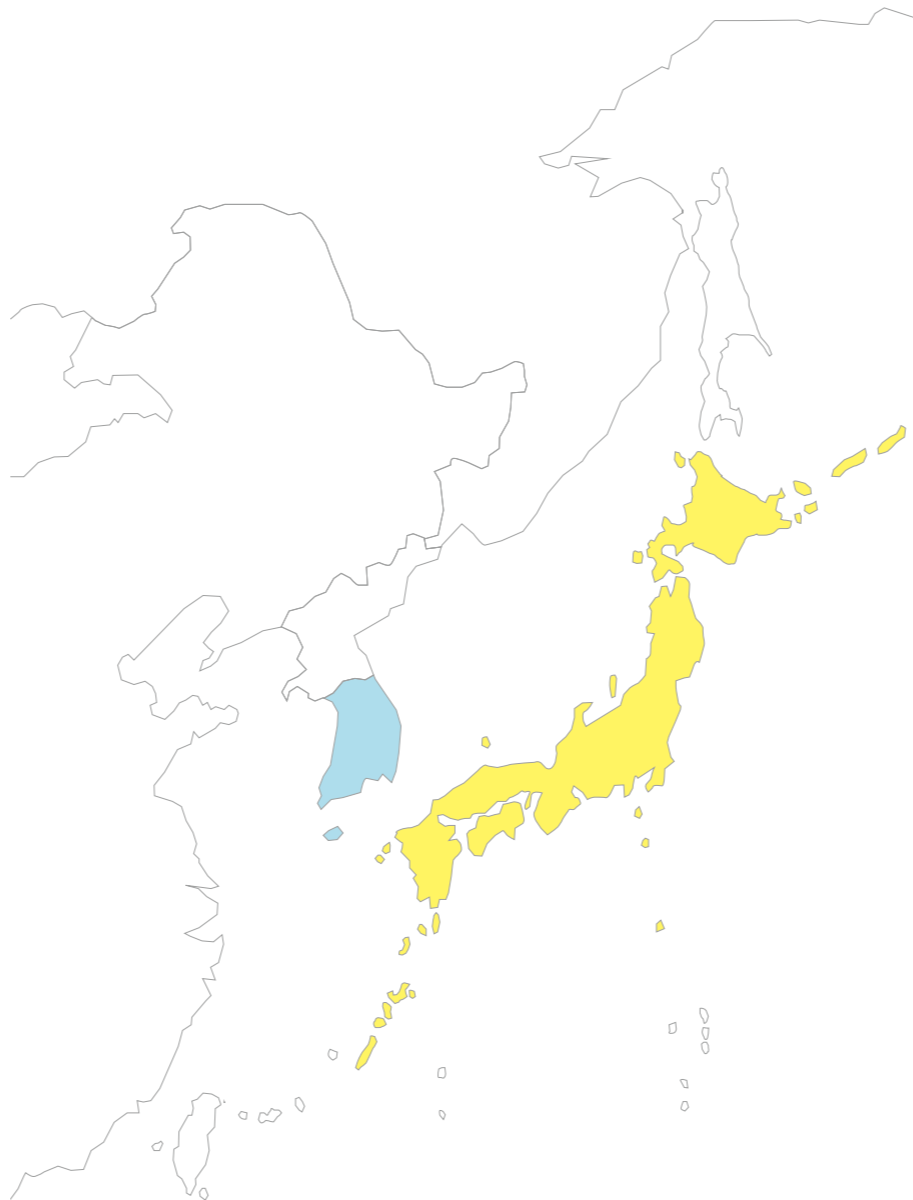
鳥の劇場 芸術監督 中島諒人

새극장 예술감독 나카시마 마코토

韓国芸術総合学校と、「障がい」という今日的なテーマで共同事業ができることを光榮に思う。今年にはコロナ禍のため、直接会っていっしょに演劇作品を作るという当初の予定は変更せざるを得なかったが、ビデオ会議や映像のやりとりなどを通じて、ていねいに日韓双方の状況を共有できたことは、逆にこの大きなプロジェクトの始動のためには良かったかもしれない。何しろこの事業は、日本と韓国というとかく壁ばかりが意識されがちな関係の中で、演劇の創作を通じて障がいという壁を超えているんな人が共に生きることの豊かさを発見し深めていこうという壮大なものだ。けれどその壮大さにも関わらず、着手してみても分かった、このコラボは生きることや表現することの根本に人を立ち帰らせる力を持っている。リモートの交流を通じて、本質的な果実をすでに生み始めている。「とある村」プロジェクトのネットで公開している映像、リーディング上演、トークなどを通じて、今回生まれた可能性の芽を是非多くの方々に知っていただきたい。現代生活の中で我々が忘れがちな、他者への優しさや寛容さという人間の本性について、心の深いところで何かを思い出させてくれると思う。

한국예술종합학교와 ‘장애’라는 오늘날에 맞는 주제로 공동 사업을 하게 된 것은 영광스러운 일이다. 올해는 코로나 사태로 인해, 직접 만나서 연극 작품을 함께 만든다는 당초의 예정을 변경할 수밖에 없었으나 영상 회의와 동영상 교환을 통해 한일 쌍방의 상황을 꼼꼼하게 공유할 수 있었던것이 오히려 이 큰 프로젝트의 시동을 위한 힘이 된 것 같다. 한일관계라고 하면 ‘벽’만 떠올리기 쉬운 관계지만, 이 사업은 연극 창작을 통해서 장애라는 벽을 넘어 다양한 사람들이 함께 삶의 풍요로움을 발견하고 발전시켜가려는 장대한 프로젝트다. 하지만 그 장대함에도 불구하고 시작부터 바로 깨달았다. 이 콜라보레이션은 우리를 삶과 표현의 근본으로 되돌아가게 만드는 힘을 가지고 있다. 원격 교류를 통해서도 이미 본질적 결실을 맺기 시작했다.

‘어느 마을’ 프로젝트의 인터넷 공개 동영상, 리딩 공연, 토크 등을 통해서 이번에 피어난 가능성의 새싹을 꼭 많은 분들께 보여드리고 싶다. 현대생활 속에서 우리들이 잊어버리기 쉬운, 타자에 대한 배려와 관용이라는 인간의 본성에 대해 마음 속 깊은 곳에서 뭔가를 일깨워 줄 것이라 믿는다.



韓国側オーガナイザー：韓国芸術総合学校

한국예술종합학교교수 이성곤

韓國藝術綜合學校教授 李星坤 イ・ソンゴン

## 인사말

<어느 마을> 프로젝트는 한국예술종합학교 연극원의 <주인없는 땅>이 새의연극제에 초청받으면서 논의가 시작 되었다. 당시 새의극장은 베세토연극제의 일환으로 대학연극제를 조직했다. 거기에 우리가 초청을 받은 것이다. 한국예술종합학교와 새의극장은 MOU 를 맺고 교류를 약속했다. 민간극단과 국립대학 간의 교류협정은 흔한 일이 아니다.

무엇보다 ‘장애’를 주제로 <어느마을> 프로젝트를 진행하게 된 것이 기쁘다. 장애는 조건이 아니라 예술의 풍부한 주제다. 최근에는 좁은 의미의 ‘장애’ 개념에 가두기보다는 문화다양성 구도 속에서 새롭게 정의하려고 시도 한다. 장애인뿐만 아니라 장애사나 장애인과 비장애인의 협업, 장애인 관객을 위해 만들어진 연극 등을 포괄하여 포용적 예술(inclusive arts)로 재배치하자는 의견도 있다. 전통적 연극미학 개념을 전복하는 미학적 가능 성을 제시해주기도 한다. <어느 마을> 프로젝트가 그 가능성을 보여주었으면 좋겠다. 나아가 무역갈등으로 경색 된 한일 관계가 풀리는 데 작은 계기라도 될 수 있다면 더 바랄 것이 없을 것 같다.

「とある村」プロジェクトは、韓国芸術総合学校演劇院の「主なき土地」が鳥の演劇祭に招聘されたことから議論が始まったものである。当時、「鳥の劇場」は、BeSeTo演劇祭の一環として大学交流を企画した。そこに私たちが招聘されたというわけだ。韓国芸術総合学校と鳥の劇場はMOUを締結し交流していく事を約束した。民間劇団と国立大学の交流協定は稀な事である。

「障がい」をテーマに「とある村」プロジェクトを進めることになったことは何よりも嬉しい。障がいは条件ではなく芸術の豊かなテーマだ。最近では、狭義の「障がい」という概念に縛られるより文化の多様性の構図の中で新たに定義をしようと試みている。障がい者だけでなく、障がい叙事、障がいのある人とない人のコラボレーション、障がいのある観客のために作られた演劇などを包括して、包容的芸術(inclusive arts)に再構成しようという意見もある。伝統的な演劇美学の概念を覆す美的可能性を示している。「とある村」プロジェクトがその可能性を見せてくれたらと思う。ひいては、貿易摩擦で冷え込んだ日韓関係の改善の小さなきっかけにでもなってくれば、それ以上望むものは何もない。



## 事業実施スケジュール

### 2020年

- 1月 事業発足に向けて、鳥の劇場・韓国芸術総合学校による初回の打ち合わせを鳥取市内にて行う。  
その内容に沿って、演出家・脚本家など主要メンバーの選定を日韓それぞれで行う。
- 2月 日韓メンバーによるzoomでの会議(関係者が鳥取で一同に会す予定だったが、コロナウイルスが世界的に急速に広まってきたタイミングであり、急遽zoomでの会議に切り替えた)

#### 事業概要の骨格固め

→この時点では、コロナの状況も見つつ、ひとまず9月に開催する「鳥の演劇祭13」に向けて日韓共同で演劇創作する方針とした。

- 4月 「鳥の演劇祭13」では海外団体を招聘しないことに決定。  
それに伴い、コロナが収束する事を期待し、プロジェクトの実施時期を冬頃まで遅らせることに。

- 7月 戯曲概要(方向性)の打ち合わせ。戯曲執筆の開始

- 8月 戯曲「とある村」第一稿が完成

- 9月 日韓共同制作を断念し、代わりに日韓それぞれで「とある村」をリーディング作品として創作することに方針転換



- 10月 戯曲「とある村」完成

- 11月 日本側の創作を担う出演事業所の募集を開始

- 12月 事業所選定の上、出演事業所を「社会福祉法人わたぼうしの会 たんぼぼの家アートセンター-HANA」に決定。  
日本チーム稽古開始

### 2021年

- 1月 韓国チーム稽古開始

- 2月 稽古の進捗を動画で共有しながら、日韓チーム交流の会議を行う

- 3月2日 「とある村」日本編 ライブ配信上演

- 5日 「とある村」韓国編 ライブ配信上演



※2020年7月1日(契約締結日)以降、文化庁委託事業として開始

## 公演実施概要

# 「とある村」〈어느마을〉

リーディング公演+ライブ配信 리딩 공연+라이브 방송

### 日本編 日本編

3月2日(火) 13:30~

上演時間: 1時間20分 ライブ配信のみでの上演  
※鳥の劇場YouTubeアカウントに配信アーカイブ映像あり。

アフタートーク

同日 15:30~(16:30)ライブ配信

会場: シアターポポ(無観客上演)

3月2日(火) 午後1時30分부터

공연 시간 : 1시간 20분 라이브 방송

애프터토크

당일 오후 3시 30분부터 (오후 4시 30분) 라이브 방송

장소 : 씨어터 포포 (무관객 공연)



### 韓国編 한국편

3월4일(목)·5일(금) 오후 7시 00분부터

5일에만 라이브 방송

애프터토크

5일에만 라이브 방송

장소: 한국예술종합학교 연극원 실험무대

3월4日(木)·5日(金) 19:00~

5日のみライブ配信あり

※韓国芸術総合学校YouTubeアカウントに配信アーカイブ映像あり。

アフタートーク

5日のみ 라이브配信

会場: 韓国芸術総合学校 演劇院 実験舞台



## 作品内容

### 「とある村」あらすじ

物語の舞台である「とある村」では、卵がとても大切な食べ物となっている。村人たちは卵を食べて働く意欲を湧かし、毎日それぞれの仕事をこなす。

しかしある日、鶏が卵を産めなくなってしまった。獣医師によると鶏がうつ病になったらしい。

はじめ村人たちは鶏を心配するが、卵が無いストレスから仕事も満足に出来なくなり、次第に村全体が不安定になっていく…。

### 作家の言葉

イ・ヨンジュ

私たちは今、共に暮らしているのでしょうか？これは、本作品を準備しながら最もよく頭に浮かんだ疑問です。生きとし生けるものすべての存在に対し、「私たち」や「一緒に」という言葉は、とても安易に皆を「ひとつ」にしてしまう言葉であると同時に、簡単に境界線を引いてしまう言葉でもあると思います。今の私たちはどんなやり方で共に暮らしているのでしょうか。劇場で共に経験し共にいることがもう簡単には許されない今、これまでの劇場をめぐる蓄積を問い直すこととなります。それでも、皆が互いにしっかりと向き合う時間に思いを馳せます。この悩みを分かち合っていたいた韓国と日本チームの皆さまに心から感謝いたします。

### 〈어느마을〉 줄거리

어느 마을. 마을의 구성원들은 각자의 역할을 한다.

사람들은 일을 하고, 동물은 각자의 생산 및 번식을 한다.

마을 사람들의 주식은 계란으로 만든 음식이다.

그러던 어느 날, 사람들은 닭장의 닭들이 알을 낳지

않는다는 사실을 알게 된다. 마을 사람들은 생존을 위한 방법을 찾아간다.

### 작가의 글

이연주

우리는 지금 함께 살고 있나요? 이번 작업을 하면서 가장 많이 들었던 질문입니다. 살아가고 살아내는

모든 존재들에게 ‘우리’와 ‘함께’라는 단어는 참 쉽게 아우르는 동시에, 쉽게 경계를 짓는 말이기도 한 것 같습니다. 현재의 우리는 어떠한 방식으로 함께 살고 있나요?

극장에서 함께 경험하고 존재하던 시간이 더 이상 쉽지 않은 일이 되어버린 지금, 그동안 극장은 어떤 경험을 했는지도 다시 묻게 됩니다. 그럼에도 서로가 서로를 온전히 마주하는 시간을 상상합니다. 함께 고민을 나눠주신 한국과 일본 제작팀 모두에게 감사합니다.

## 作家 / イ・ヨンジュ Profile

2010～15年、障がい者劇団「エイン」で演出家として活動。エインとはその後も2年に1度のペースで創作している。2011～2013年、「ゴドーを待ちながら」(ベケット作)脚本整理・演出

2012年、「障害、第3の言語で語る」構成・演出：俳優それぞれが作成したライフストーリーとインタビューや討論などを通して構成した作品。個人の具体的な生活から障がいを見つめる過程を扱う。

2012年、「あなたは私だ」作：母が亡くなった後、一緒に暮らし始めた兄弟の物語。兄は施設で、弟は家で一生暮らしてきたため、二人の異なる生き方は葛藤を呼ぶが、お互いを通して自分を見直す過程を描く。

2015年 「2015障害、第3の言語で語る」構成・演出

2017年 「戦場の散歩」(Fernando Arrabal作)演出

2019年 「認定闘争；芸術家編」作・演出

2015年からは、一人劇団「電話ベールが鳴る」を旗揚げ、作・演出を担当している。

労働や女性の話に興味を持っており、構造(社会)の中の個人に注目しながら活動している。

2017年 「電話ベールが鳴る」作・演出／「2017イバン検閲」構成・演出／ヘファドン1番地×セウォル号プロジェクト「乳酸菌と一陣」(ハン・ヒョンジュ作)演出／青少年劇フェスティバル「笑いの高校」(チョン・ジンセ作)演出／「誰でもない」(ファン・ジョンウン作)脚色・演出

2018年 「オマール—私が結局なれるもの」(アラン・ポール作)演出／青少年劇創作ベルト「Gの領域」朗読公演 演出／アジアのためのシンフォニー「Red Oleanders」(タゴール作)朗読公演 演出

2019年 古典小説パンソリ「雲英傳」「彩鳳感別曲」脚色・演出／「これが最後」作

## 脚本翻訳 / イ・ホンイ Profile

延世大学 心理学・フランス文学専攻 卒業

ソウル大学大学院 公演芸術学 修士課程 卒業

(日本)お茶の水女子大学 比較社会文化学 博士課程 単位取得退学

【翻訳書】

音楽書「リヒャルト・シュトラウス」(タラシル出版社、2021)

小説「散歩する侵略者」(アルマ出版社、2019)

戯曲「散歩する侵略者」(アルマ出版社、2019)

エッセイ「いつか別れる。でもそれは今日ではない」(タサンブックス、2018)

小説「楽観的な方のケース」(アルマ出版社、2017)

小説「わたしたちに許された特別な時間の終り」(アルマ出版社、2016)

【翻訳／脚色／ドラマトウルク】

●「神の末っ子アネモネ」翻訳 ●「外地の三人姉妹」ドラマトウルク ●「偉大なる生活の冒険」ドラマトウルク

●「ハッピーパン屋のレシピ」(原作「つながりのレシピ」)翻訳・脚色 ●「イコール」翻訳 ●「ファーム」翻訳

●「おやすみなさい」翻訳 ●「クレオパトラ」翻訳 ●「わが星」翻訳 ●「その森の奥」翻訳／通訳

●「散歩する侵略者」 ●「隣にいても一人」翻訳／脚色 ●「うん、さようなら」翻訳／脚色

# 作品創作過程①

鳥の劇場で一緒に一つの作品を創作する予定であったが、コロナ禍でその計画は白紙となり、戯曲の作成は予定通り進めながら、コロナの状況を静観することとなった。

夏以降、徐々にコロナの感染対策が明確になるにつれ、日本と韓国が同一の脚本を使い、それぞれ作品を作る方向に企画を練り直した。

外部との接触を最小限に抑えるために、韓国は大学内で演劇を創作し、日本は演出家の住む関西圏内に限定して演劇を作りたい事業所を公募した。事業所には基礎疾患のある方もいるため、鳥取から対象となった事業所への移動も極力少なくする必要があり、演出家と事業所が協力して作品創作ができることが肝心な要件となった。応募の中から選ばれたたんぼの家は、これまでも演劇作品を作ったことがあり、そのノウハウについては定評がある。

あくまでも日韓の共同制作事業であるため、ただ同じ戯曲を使っているというだけではなく、ZOOMを使い、制作過程の情報を互いに共有しながら、作品づくりを進めていった。

## 創作過程共有のZOOM会議 第1回目：2021年2月3日実施

### 参加者 日本側：

もりながまこと(演出)、佐藤拓道(演出助手/たんぼの家アートセンターHANA副施設長/俳優)、藏元徹平(演出助手/たんぼの家アートセンターHANAスタッフ/ダンサー)、田川智子(通訳)、中島諒人(鳥の劇場芸術監督)、中島佳子(鳥の劇場制作)、浜田連珠(鳥の劇場制作)

### 韓国側：

チョン・ソングョン(演出)、イ・ヨンジュ(脚本)、イ・ホンイ(ドラマツルク・翻訳・通訳)、イ・ソンゴン(韓国芸術総合学校教授)、クォン・ヨンスン(韓国芸術総合学校教授、制作監督)

**鳥の劇場 浜田(以下浜田)：**稽古の動画を拝見しまして、日韓で作品の取り組み方にかなり違いがあって面白いなと思いました。感想・疑問点をお互いに聞けたらと思います。

**韓国芸術総合学校 クォン・ヨンスン氏(以下ヨンスン)：**日本と違って韓国の場合は1月から稽古を始めたので(※日本チームは12月から稽古開始)、韓国チームはまだテーブルで本読みをしている段階です。映像だけ見るとちょっと違うように感じられるかもしれませんが、演出家が何を考えながら創作しているかを聞いた方がいいかなと思います。

**演出家 チョンソンギョン氏(以下ソンギョン)：**まずいただいた映像はとても興味深く見ました。稽古の映像もとても楽しかったのですが、最初の創作メンバーの紹介映像もすごく楽しくて、早く会いたい気持ちが伝わりました。

一番印象的だったのは、もりながさんが俳優それぞれに違う体

たことです。個人的には最初この脚本を読んだ時に、この村の共同体の人たちは、もちろん個人個人みんな違う人なのですが、ある要素によって同じような人間になった人たちだというふうに思ったからです。ここが一番の差だと思ったのですが、韓国の場合は、最初はこの人たちが結局同じだ、この村の構成員たちは一つだ、ということから出発して、物語が流れる中でそれは不可能だという結末に向かっていく形になるのですが、日本チームの場合は最初からそれぞれの違いに注目しているように思えたので、それがこの作品の中でどのように表現として出てくるかがすごく気になり、見てみたいと思いました。

**演出家 もりながまこと氏(以下もりなが)：**私の場合、作品をいただいて、作家のヨンジュさんから少しお話も聞いて、作品の解釈について幅の広い許容を持っていらっしやるのでまず安心しました。まずこの作品では命について一つのトラブルが起こるわけですね、卵が生まれにくいという。それについてどうするの

という事が村や登場人物たちで色々執り行われるわけですが、読んでいった時に何か、登場人物たちの会話の中に、今まで以上のものになろうとしているものを感じたんです。でも人間は人間なので、人間以上のものにはなれない。なろうとした時に卵が割れちゃうという不条理劇の形になっているなと思ったんです。日本チームの俳優は様々な障がいを持っておられて、作品の中で行われている事が、彼らにとっては全く別次元の世界なんです。この人たちは何をやっているんだろうか？何を言っているんだろうか？という感じなんです。でもだからこそ、登場人物が作品の中で行っていることを非常にコミカルに出演者は感じていると思います。公演ではそのギャップを表現できたらなと思っています。つまり、何とかしようとする登場人物たちを、様々な障がいのある人たち、もう自分の命はこうだと受け入れている人たち、何とかしようとはしていない、受け入れるという世界観を持っている人たちが演じるというところで、作品に何か新しい視点が生まれれば面白いかなと思って取り組んでいます。

**劇作家 イ・ヨンジュ(以下ヨンジュ)：**日本の映像を見て、とても楽しかったです。今、一緒に稽古ができなくて、どういう風に稽古をしているのかとてもみたかったのですが、今回の短い映像だけでも、私が予想できない作品になるかもしれないというのがわかってとても興味深く拝見しました。

一番お聞きしたいと思ったのは、俳優の中でどんな会話があるのか、どんな話をしているのかということです。コミカルに感じている部分もあるとおっしゃったんですけど、どんな話がありましたか？

**もりなが：**みんな内容がわからなすぎて、その反応がすごく面白いです。はじめ、演出助手の佐藤さん、藏元さんと3人で、みんなの前でリーディングをしたんですよ、何度か。そうするとみんなの顔がポカーンとして、中には寝ている人もいるし、寝るな、聞け！と(笑)そういうところから始めたんです。それは寝るから悪いのではなく、そのギャップが私はとても楽しいと思っているんです。私たちが説明していることに対して、何をそんなにムキになっているんだという反応がとてもおもしろいと思うんです。私はそこに答えがあると思っています。文章を読めない方が来られたとします。そうすると、健常者の感覚では読める・読めないの二択なんです。読めないからあなたは演劇は無理だよという選択になりますよね。我々の場合はそういう判断をするのではなく、読めないのなら、どういう風に伝えていくのか、口で伝えていく、イラストで描いて提示していく、様々な伝え方があるわけですね。ですから読めないことに責任があるのではなく、抱えている内容を伝えるこちら側の責任とっていつも伝えていきます。それで稽古場ではお互いの関係性が平等になるんです。彼らは伝えて

もらったことを自分の体で表現し、我々はなんとか抱えている内容を伝えようとする。関係性がとてもフェアになるので稽古場がとても楽しい。

**ヨンジュ：**送っていただいた映像の中で、卵が孵化するシーンがあったと思います。それがとても特別な儀式のように見えたのですが、それは日本のそういう儀式があるんでしょうか？それとも特別に作ったものでしょうか？

**もりなが：**特別につけています。今回一緒に参加している藏元さんがダンサーなので、彼にその場面の動きをつくってもらっています。

**たんぼの家 藏元徹平氏(以下藏元)：**いただいた台本に「お祭りのようにお祈りのように羽を広げ卵へ向かう」というような卵の孵化を願うト書き(説明文)があり、もりながさんから、もしイメージがあったら何か提案して欲しいと言われました。演劇に参加しているメンバーの中で、今年から演劇のプログラムに参加した60歳のおじさんがいるのですが、彼のダンスがとても良く、その方はお祭りの時だけは必ず生まれ故郷に帰るというくらいお祭りが好きな方で、以前僕が楽器を鳴らしながら彼が踊るということをしたことがありました。それがちょうど合うんじゃないかというご提案をさせていただきました。

**たんぼの家 佐藤拓道氏(以下佐藤)：**フィジカルな動きのところは藏元くんをお願いしてつくってもらっているので、冒頭の部分の工場長とかがすごく速く動くところとかは振り付けで、ダンスのような感じでつくっています。

**藏元：**戯曲に書いてある「登場人物が何かをしている」という場面の動作部分だけを別の役に当てたりして、セリフは本来の役の方が言いながら、動作は別の方がやっているということもあったりします。要は、僕は戯曲の内容というよりも戯曲で行われている具体的な行為とか動きをビジュアル化したものをもりながさんにご提案しています。ただそれがダンス寄りになりすぎてちょっとおかしかったり戯曲の内容とズレてしまうこともあると思うので、そこを良い具合に混ぜれたらいいなと思っています。

**もりなが：**今回、芝居の中で映像も使おうと思っています。事前に色々撮ったものを編集して、別で撮った出演者の声などもミックスして、それと本番の映像を重ねてみるというようにつくりもやってみようかなと、挑戦しています。

**ヨンジュ：**台本を書いた時は、物語が複雑になる可能性もありつつ、なるべく直感的に読めるように書きました。それが俳優を通してもっと生々しく表現されそうでとても楽しみにしています。期待しています。

**もりなが：**台本の中には、出演する彼らにとっては非常に複雑な

展開もあり、それをちょっとシンプルにさせていただいた部分もあります。ご理解ください。

ヨンジュ：シンプルにして頂いたことで俳優によってもっと豊かな表現ができると思いますので良い選択をされたと思います。ありがとうございます。

もりなが：ビデオを見させていただいて、演出家の方はじめ、韓国の皆さんは障がいのある方と普段接することがないというお話がありました。今回のプロジェクトは「障がい」がテーマですが、稽古の中でどのように障がいについて考えておられるかお聞かせください。

ソンギョン：韓国チームでは調理師、工場長、農夫役の3人が、それぞれ種類は違いますが障がいを持っている方です。それ以外の、獣医師役の俳優は普通に俳優活動をしている韓国人の俳優です。心理療法士は俳優で、現在韓国芸術総合学校に留学しているインド人の方です。劇場長を演じる方は俳優でもない、学校でお掃除をしている方です。私も今質問していただいたように、稽古をしながら、障がいというテーマをこの物語を通して直接的に扱えるかどうか、どう扱えばいいかを悩んでいるのですが、今の段階では共同体というキーワードにフォーカスを当てています。共同体というのは皆同じ構成員が集まっていることを前提としていると思うのですが、その中で障がいを持っている人は、同じ構成員“ではない”というようにみんなに思われていると認識しています。韓国ではもうすぐソウルの選挙があるのですが、障がい者施設を出た人たちや施設の中にいる人たちが一緒に政党を作って、選挙運動をしながら障がい者の権利などを一般市民に向けて色々主張をしているとニュースで見ました。そのニュースにいるんな人の意見の書き込みがあったんですけど、「障がいを持っていることで守ってもらうのではなくて自ら何かをしようとする姿勢が必要だ」という内容を見ました。結局、「共同体になる」とは「共同体の一員になる」ことだと思うんです。この作品で話をしますと、この村の中には今、俳優たちをみると障がいを持っている人もいれば韓国人ではない人もいるし様々な人たちが集まっています。その中で鶏と卵というみんなの共通の問題が起こってしまいます。結局それは私たちは一つになれるんだろうかという問題にもなるし、一つになる必要があるかどうか、それぞれ一人の個人として生きることはできないかの問題にもなると思います。それについて考えたいと思いました。

佐藤：韓国では、障がいのある人はどれくらい割合で社会進出しているんでしょうか？

ヨンジュ：社会の中で何パーセントくらい進出しているか、私は詳しくはわかりませんが、仕事や日常の中で障がいを持って

いる方に会うことがまず珍しいです。

ソンギョン：社会活動をしている人の数はわかりませんが、この稽古をする中で俳優たちと仕事について話したことがあります。もちろん私たちの話で一般的な話とはまた違うと思うんですけど…うちのチームの障がい者のうち2人は仕事をしたことがありました。その話を聞いてみたら、日本も同じだと思うんですけど、韓国の場合、ある程度会社が大きくなると義務的に障がい者の人を雇わなければいけません。その規定があった会社に就職した人がいて、就職してみたら義務だから仕方なく無理やりに雇ったというのが強く感じられて、すごくネガティブな気分になり、結局その仕事を辞めたそうです。それを聞いて、社会活動をするというのが普通の人と完全にベースから違うんだなということに気づきました。普通の人もそうだと思うんですけど、障がいを持っている方にとっては、この社会で私は必要な存在だということをよりもっとアピールしなければいけない状況だというのがすごくわかりました。これは本気ではないと思うんですけど、「ここでは自分は必要とされてないと思った瞬間死にたいと思った」という人もいました。この社会で障がいを持っている方が自分として存在することができるかの問題にも繋がると思います。また、うちの学校の演劇科の中には障がいを持っている人がいません。今、学校で稽古をしています、学校の施設が障がいを持っている人にとってすごく不便な形になっていて、問題点が一つ一つ出てきています。

ヨンジュ：例えば、電車とかバスとかも車椅子で自由に乗れるようになったのが10年前くらいなので、外での活動はかなり難しいです。あと障がいを持っている方たちが、主に都市じゃない田舎の施設の中で集団生活をしていることが多かったのでその問題もあります。さっきソンギョンさんが言ったように選挙運動などで脱施設運動をしているんですけど、その問題とも繋がると思います。創作活動をしていると、個人によって活動に対するサポートの度合いや長期間稽古ができるかどうかも違います。その中で一番やりやすい方法をとっている部分もあると思います。例えば今韓国チームで参加している障がい者の俳優たちも一人で稽古場まで来られる方々です。稽古時間も十分確保できる人たちです。そういう点が日本チームと韓国チームの大きな差ではないかと思いました。

佐藤：僕も障がいがあって、体に障がいがある人間が障がいのある人をケアしてたりするんですけど…。日韓でもいろいろ状況は違いますね。日本もいろいろ進んできてはいるもののまだまだなところはあって、会社が障がいのある人たちをどれくらい雇用できているかっていうのは問題になっているので、社会問題と

して取り組んでいかなきゃとは思ってますね。僕がこの演劇でやりたいと思うのは、障がいのある人たちがこの台本にどう取り組むかっていうのを見せられたいいな、ということです。台本を表現することも大事なんだけど、この台本があって、それにどう障がいのある体で向き合ったのかということと、どうサポートしたかというのを見せられたらそれが何かのヒントになるかなと思ったりします。

蔵元：僕も精神の障がいがあります。脳みその何かがバグっているようで、基本的には1、2時間おきに目が醒めたりとか気持ちの波が上がり下がりの差が激しかったりとか。なので演出助手が2人とも障がい者という、またこれも面白いなと思います。

もりながさんが、読めないということに責任があるわけじゃなくて伝える側の我々がどう伝えるかが大切だというお話をされていましたが、それは福祉の視点も同じで、「医学モデル」と「社会モデル」というものがあるんですけど、医学モデルでは、障がいを持っていることが異常なことであるというような捉え方なんですけど、社会モデルだと社会が配慮をしていないから障がいのある人が不便な生活になってしまうという捉え方になります。その考え方ももりながさんの演出の考え方っていうのはすごくリンクするところがあるなというのは感じていて、それはもりながさんも長い間たんぼぼのメンバーと関わってこられたことだったり、僕らも演劇の稽古以外の食事だったりトイレだったりとか別のプログラムでも彼らと接しているので、だからこそ生まれてくる視点っていうのが今回の演出の中に混ざってくるのかなというのを感じました。

韓国の小中学校って、日本でいう特別支援学級みたいな障がいのある子がいるクラスっていうのも無いんでしょうか？

ソンギョン：最近をよくわからないんですけど、自分の子どもの時は普通に一つのクラスの中に障がいを持っている子が何人か混ざっているケースもありましたし、障がい者のための特別な学校もあります。

ヨンジュ：私も今の小中学校の事情はよくわからないんですけど、一般的に知られているのは同じクラスの中で一緒に混ざって勉強しているケースがあったり、あとは特殊学校といって障がい者のための特別な学校があります。

ソンギョン：質問なんですけど、そういう障がい者のための学校に対する一般人の認識がどうかについてお聞きしたいです。韓国の場合はさっき話した特殊学校、障がい者のための特別な学校が自分の町にあるとそれを嫌がる人がいるんです。例えば高級マンションとかアパート団地の中にそういう学校が建てられることになるとその辺の家の値段が下がるとか、雰囲気が悪く

ないという不満、文句を言う人がいるんですね。そういうところで教育を受ける人たちがどんな気持ちなのかとか、それに対する人たちの認識がどうなのかをお聞きしたいです。

もりなが：日本でも同じですね。基本的には地域住民の方から必ず反対が起こりますし、それに対しての行政または施設の人たちの粘り強い説明・説得が必要になります。やはり韓国の方と同じだと思うんです。知らないということが障がい者に対する恐怖を生んでいるので、知ってもらうことがとても大事です。そういう意味で演劇が担っている責任って日韓ともに大きいと思うんです。社会的な責任というものが、今回の仕事でみなさんと一緒にその一端を担えたらなと思っています。

ヨンジュ：さっき社会モデルと医学モデルの話もしていただきましたが、その社会モデルでの必要性も大事だと思います。この作品を通してみんなそれぞれが実存しているということを語っていきたいです。そういう姿が稽古の過程で映像を通して見ることができたのでとても安心しています。

ソンギョン：私も映像を見てすごく印象的だった部分があり、今の話と繋がっていると思うのでちょっとお話をしたいと思います。自分の子どもの頃なんですけど、うちの町にダニエル学校という支援学校がありました。多分、教会が運営していてそういう名前になったと思うんですけど、子どもの時はその「ダニエル学校」という名前を聞いて、私も友達も障がい者を見たら「ダニエルだ」と言いました。その「ダニエル」とか「障がい者」とか、個人じゃなくてその一般名詞になってしまうことがあまり良くないんじゃないかと思います。今イ・ヨンジュさんは「実存」という言葉を使ったんですけど、もっと個人個人の体とかを考えるべきだと思いましたし、この公演を通してみんなありのままの姿を見せたいなと思いました。俳優一人一人が何かをやり切るというよりは一人一人が何かをやっているその姿を素直に表現できたらいいなと思いました。

鳥の劇場 中島：みなさんありがとうございました。すごく良い話し合い・意見交換ができたと思います。

## 作品創作過程②

日本編の獣医師役：上埜さんが、韓国の獣医師役：ホン・ソヌさんの映像での発言を受け、話してみたいということに。

### 創作過程共有のZOOM会議 第2回目：2021年2月17日実施

#### 参加者 日本側：

上埜英世(獣医師役/たんぼの家アートセンター-HANAメンバー)、もりながまこと(演出)、佐藤拓道(演出助手)、藏元徹平(演出助手)、田川智子(通訳)、中島諒人(鳥の劇場芸術監督)、中島佳子(鳥の劇場制作)、浜田連珠(鳥の劇場制作)

#### 韓国側：

ホン・ソヌ(獣医師役)、チョン・ソンギョン(演出)、イ・ヨンジュ(脚本)、イ・ホンイ(ドラマトルク・翻訳・通訳)、イ・ソンゴン(韓国芸術総合学校教授)、クオン・ヨンスン(韓国芸術総合学校教授、制作監督)

鳥の劇場 浜田：今日は獣医師役お二人のミーティングということで、早速ですけど、上埜さんやホンソヌさんからお互いに質問したいこととかお話ししたいこととかありますでしょうか。獣医師役 ホン・ソヌ氏(以下ホンソヌ)：まず、僕が動画の中で獣医師役の方と一緒に話してみたいですと言ったのですが、こういう場を作っていただいて本当にありがとうございました。動画の中で話していた、この役を難しいと感じた理由は、この作品の中ではそれぞれの範囲というか、(共同体としての)領域があって、例えば農夫とか調理師とか工場長の領域というのはあるんですけど、獣医師の領域の役割というのは一体なんだろうというのが難しいと感じました。でもそれは、今はある程度自分の中で解決ができたと思います。今思っているのは、獣医師という人物が異邦人、外部者として感じる不安とか、この村に属したいという気持ちがあると思うんですけど、その気持ちが現実の自分にとっては、例えばあまり自分はこの社会に属したいという強い欲求というのがないので、どのようにこれを表現していけばいいのかがよくわからないなという悩みがあります。あとこの作品の中では自分が必要な存在だということをアピールしなければいけないんですけど、それとは別にこの獣医師という役はこの村の人たちが今聞きたがっている言葉を言わなければいけないという役割もあると思います。それもどのように表現すればいいかが今すごく悩んでいるところで、村の人たちとちょっと違うふうに自分を見せるためにはどのようにすればいいかが今の課題だと思っています。日本側の動画を見た時にとても印象的だったのが、

もりながさんが一人一人それぞれ違う体、違う障がいを持っているので違う言語を持っているというふうにおっしゃったのがとても印象的でした。韓国では獣医師は私、韓国人が演じていて、(獣医師と双子である設定の)心理療法士役はインドから来た俳優が演じています。台本の中に、「獣医師と心理療法士が、村人たちが使っている言語とは違う言語を使って喋る」という場面がありますが、文字通りインドの言葉と韓国の言葉両方を使いながら会話をしています。でも日本では同じ日本語を使って違う言語というのを表現すると思うので、それはどのように表現しようとしているかについてもお聞きしたいです。演出家 もりながまこと氏(以下もりなが)：我々は日本人だけでやっていて、日本の関西地方というところにみんな住んでおります。標準語ではなく、いわゆる方言を普段使っています。芝居の中では、獣医師が村人3人としゃべる言葉は標準語、心理療法士と喋る言葉は関西の方言の喋り方、と変えています。体がみんな違うのでその分だけ言葉があると私は言いました。言葉の壁について、私は稽古中でも常に感じています。それを考える中で戯曲の中にある言葉で印象的な言葉があって、それが「異邦人」という言葉です。異邦人と呼ぶ人と、呼ばれる人に分かれるわけですね。我々は常にそういった壁を持っていますよね。例えば2000年前ローマ帝国の時代では、ローマ人はギリシャ語以外の言葉を喋る人をバーバリアンと呼んでいたそうです。それはバーバーバーと言ってたからだそうです。そういうふうにしか聞こえなかったんですね、ローマ人にとっては、異邦人という言葉がこの戯曲から読んだ時にも

そういうものを感じたんです。いわゆる、言葉が生み出す「隔ての壁」ですね。その隔ての壁っていうのは古くからあって、決して戯曲を書いた方の世界観だけの問題ではなく、我々人類が抱えている大きな問題でもあると思っています。その壁を破る方法として、いろんな考え方があるとは思いますが、私たちが今関わっている、いろいろな障がいのある方、いろいろな体を持って生きておられる方との時間の共生っていうのが非常に重要なキーワードになるのではないかなと私は考えています。今回の公演には字幕が入りますが、出演者の方々の言葉は非常に聞き取りづらいものがあると思うんです。そのことについて、いやちょっと待ってよと、私たちもそうじゃないのかな、我々は今こうして通訳を通じて喋ってコミュニケーションを取れていますけれども、実際はどうなんだろう？言葉によって通じているのだろうか？ということを改めて考えて、言葉について考えられるようになればいいかなと。言葉ってとても難しいですね。

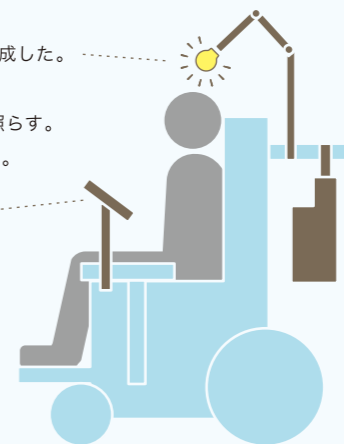
演出助手 藏元徹平氏(以下藏元)：言葉の違いということで、単純に外国語とか方言ということもあると思うんですけど、僕が5年前にたんぼの家で働き始めてみなさんに出会った頃の話を少しさせて下さい。男性のトイレの介助をして、すべて滞りなく終わった後に、相手の方から何か言われたんです。その方は身体障がいが一番重度の方なんですけど、言ってしまえばこう、一度聞いただけでは何て言っているかわからない発音をされるんですね、体の構造上。僕はそのころ初心者で素人だったので、何か間違ったことをしっちゃったかなと思ってずっと聞き返して、結局30分くらいトイレでずっと聞き返して、彼は一言を伝えるためにずっと一言を言ってるってことが続いて、で、やっと聞き取れた言葉が、「ありがとう」だったんです。同じ日本人で同じ日本語を喋っているのに、30分かからないと

ありがとう一言を聞き取れないという体験をして。その方だけではないですけど、もりながさんの言うようにいろんなお体の数だけ言葉もあるということをしごく体験した上で稽古をしているという状態です。同じ日本語だけど聞こえ方が違う。僕らはもう毎日何年も一緒に過ごしているから、誰が何を言っても聞き取れるんですけど、実際発表する時になったら、日本人の方が見ても、もしかしたら全員何を言ってるかわからないかもしれない、全員外国語を喋ってるように聞こえるかもしれない、とかそういうことも思ったりしてます。獣医師役 上埜英世氏(以下上埜)：藏元さんが言ったみたいに、スタッフやメンバー同士だったら分かり合える、わかってる言葉・会話を、私たちが知らない人たちが実際に見た時にどういう感じ方をするのかっていうのを聞きたい。それは興味があることでもあるし、怖いことでもある。

もりなが：役に関してはどのようにお考えですか？上埜：獣医師の役を振られた時は気軽に受け入れたけど、セリフが長いからどうしようかと思いました。ホンソヌ：私もそうです(笑)藏元：(上埜氏の言葉を情報を補いつつ代弁する形で)今回、リーディング公演ということでお話をいただいたんですけど、こちらの出演者が10名いる中で、文字を読む方が2人しかいないんです。なのでまず台本というものと、リーディングという方法について、もりながさんと演出助手である僕と佐藤と3人で、どのようにリーディングという方法を解釈して稽古をしていったらいいかというのを考えていたんですけど、上埜さんの場合は文字が読める方なので、セリフをスライドで作って、それを電子パッドで読めるようにして、上埜さんの車椅子に肘置きがあるんですけどそこにパッドを固定してセリフが読めるようにして練習をしています。「それがあって自信がついた」と言ってくれました。

**照明** 今回の照明チーフの魚森理恵さんのアイデアにより、図のような照明が完成した。通称、「チョウチンアンコウ」。車椅子のハンドルに装着し、出演者を照らす。車椅子が動くことで、照明も同時に動く。

**台本** 文字が読めるメンバーは、車椅子の手すりにiPadのスタンドをつけ、キーノートに台本を移し、読める環境を作る。



#### とある村 車椅子出演者の工夫

**小道具箱** 照明を車椅子に装着できるなら、小道具箱をハンドルにかけたら小道具を出し入れしやすいのではと思いつき、普段は出演者のカバンをかけているハンドルに、小道具箱を作ってかける。出演者がどこにいても、小道具をすぐ取り出せる。



上埜:はじめは結末までわからなかったんですけど、もりながさんが何回か台本の台詞を出演者に馴染みやすいような形にしていく中でだんだんわかってきたところもあって、卵が割れてしまうところとか人の愚かさみたいなのところとかもお話の中で表現したいのかなと思っています。

獣医師役の方に質問です。どのような稽古をされていますか？  
ホンソヌ:稽古が始まった時は、普段は障がいを持っている方と一緒に稽古をしたり公演をする機会がなかったので、今まで通りに稽古をすればいいと思って稽古に参加しました。障がいを持っている方と一緒に稽古をすること、今まで通り他の俳優たちと一緒に稽古をすること自体はあまり差がないと感じています。ただ、この作品自体が、今まで自分が関わった作品とは違う作品のように感じています。今、障がいを持っている出演者たちと一緒に話をする中で、たまにこういう話をしてください。自分の存在に対する証明、自分の存在感を証明すること、自分が必要な存在だとアピールしなければいけないこと、障がい者として感じている疎外について。そういった話を聞いて、今まで自分が漠然と考えて予想していたこととかなり差があったので、やはり違うなというか、そういうことを感じています。さっきもりながさんが異邦人という言葉について話してくださいましたが、まさにその感覚だと思っています。そういった感覚を獣医師として自分の体を通してどのように素直に表現できるか深く考えながら稽古をしています。今、韓国では障がいを持っている俳優と持っていない俳優と一緒に出演をしています。障がいを持っていない人として、その劇中の人物が感じる疎外とか自分の必要さを証明することとか、そこを本当に切実に表現しないとお客さんにとってはそれが偽善のように見えるかもしれない今思っています。それがただ物語の中の設定に思われてしまうのはとても勿体無いので、それを真剣に表現したい今思っています。この物語の最後の方に、獣医師が鶏の適応力とか再生産性を口しながら懂れる、そういうようなセリフが出てくるんですけど、稽古をする中で、その懂れがどれほど真剣なことなのか本当に切実に表現しないといけないというのを徐々に今感じています。あともう一つとても難しいのがインドの言葉を習わないといけないことです。インドの言葉は本当に生まれて初めて聞いた言葉で、発音する方法自体が韓国語とか英語とか日本語とは全く違います。本当に宇宙の言葉を文字を見てただ読むだけみたいな感じで、とても難しいです。これについてもっと長く話したいんですけど、演出家の悪口とかもしたいんですけど(笑)今ここにいるのでここまでにしたいと思います。

去年1月に初めてこの話を聞いた時は日本語をしゃべるよと言われたので日本語を一生懸命勉強してきたんですけど、いきなりインドの言葉を覚えるって言われて、どうすればいいんですかね(笑)。韓国で正式にインドの言葉を習える場所がないので今とても苦労しています。

上埜:インタビューのいただいた動画を見た時はヒゲが生えてなかったと思うんですけど、今ヒゲが生えているのは役を作る為？獣医師の役作りの為でしょうか？

ホンソヌ:すみません、違います。役とは全く関係ありません。実は明日CMの撮影があるんですけど、それがカミソリのCMです。今日じゃなかったらもっと良かったんですけど今日このように話をするようになってとても残念だと思っています。いつもはとても綺麗な顔なんですけど、すみません。いつもはこんな感じ(写真を見せながら)です。

浜田:もう他に質問は大丈夫でしょうか？

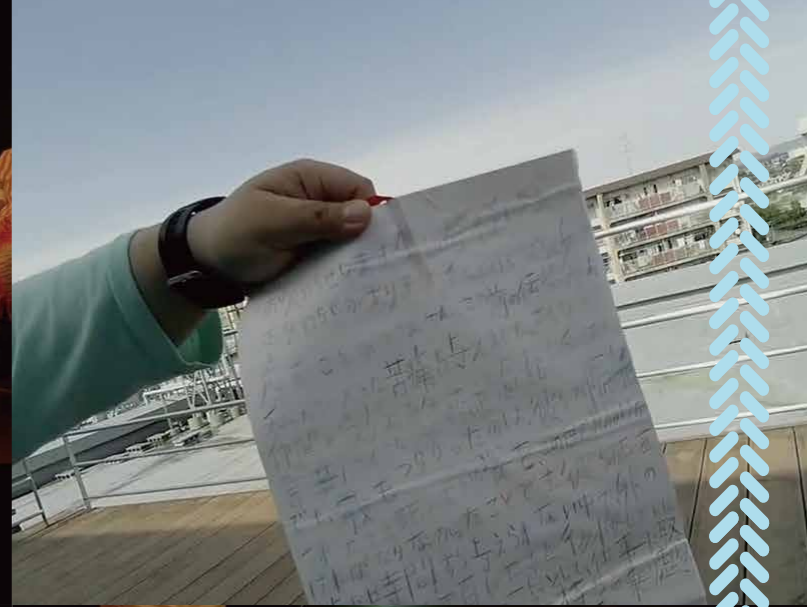
ソンギョン:今日は俳優のお二人の話を聞いて、これから自分が考えていかなければいけないことがありました。私からは以上です。

鳥の劇場 中島:みなさんのコミュニケーションが非常に活発に行われているのを見て私もとても嬉しいです。たんぼぼの家の方も通し稽古をされたと聞いています。本番がすごく楽しみになっています。また次のミーティングも楽しみにしています。鳥取はとても寒いです。今夜雪が降るそうです。

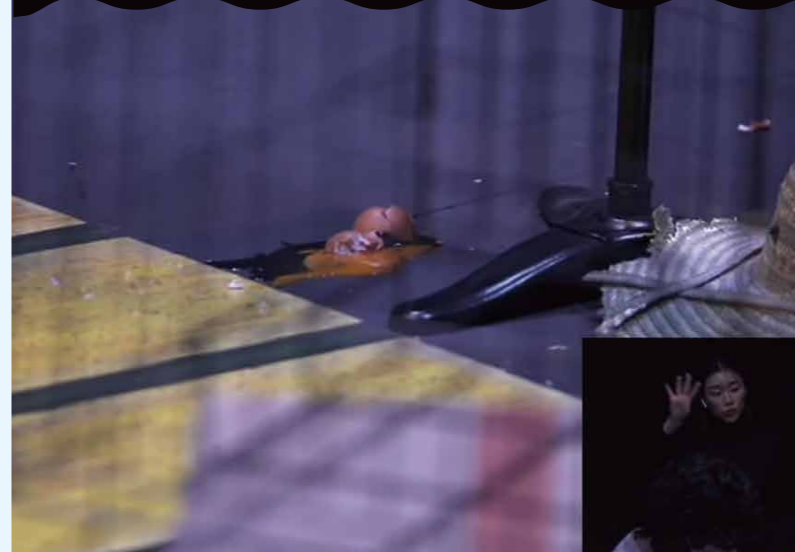
藏元:奈良も今日から急に寒いですね。気温の暖かさとかでみなさん声の出やすさが変わってくるので、本番があったかればいいなと本当に願うばかりです。



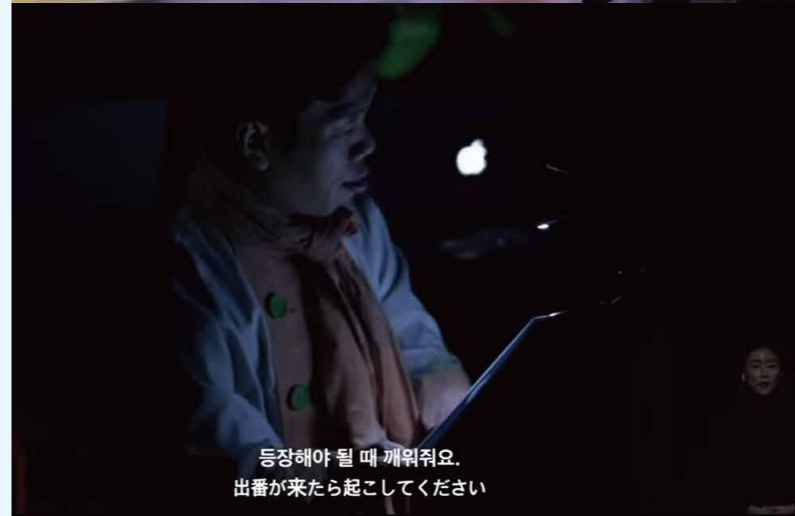
農夫/調理師/工場長:もちろんです！一緒に乗り越えられます



1日 2日 3日も過ぎてんのに



공장장:이젠 정말 한계예요.  
공장장:もう本当に限界です



등장해야 될 때 깨워줘요.  
出番が来たら起こしてください



## 作品創作過程③

今年度を振り返ってのズームでの話し合い(次年度へ向けて)

### 創作過程共有のZOOM会議 第3回目：2021年3月18日実施

#### 参加者 日本側：

もりながまこと(演出)、佐藤拓道(演出助手)、藏元徹平(演出助手)、田川智子(通訳)、中島諒人(鳥の劇場芸術監督)、中島佳子(鳥の劇場制作)、浜田連珠(鳥の劇場制作)

#### 韓国側：

チョン・ソンギョン(演出)、イ・ヨンジュ(脚本)、イ・ホンイ(ドラマトゥルク・翻訳・通訳)、イ・ソンゴン(韓国芸術総合学校教授)、クオン・ヨンスン(韓国芸術総合学校教授、制作監督)

鳥の劇場 中島(以下中島)：今日は改めて、今年のプロジェクトを振り返って、どんな可能性・課題があったのかということをもまずは話したいと思います。それを踏まえて来年度、どう事業を進展させていけるかをお話してきたらと思います。はじめにソンゴン先生いかがでしょうか。

韓国芸術総合学校 イ・ソンゴン氏(以下ソンゴン)：まず、今回のテーマの「障がい演劇」というのは、韓国でも日本でも話題にはなっていますが、これから本格的に作っていかなければいけないテーマだと思います。

今回の日韓二つの作品は、とても楽しく興味深く拝見しました。配信の上演など、制限された条件の中で、それを逆に利用して映像を使って役をキャラクター化するとか、そういう楽しい見方ができて、それでもっと意味が深くなったと思います。これから更に作品をつくらせたら、もっと予測不可能な物語とか、演劇的な面白さを追求していくのではと思いました。

中島：今回の取り組みが大学教育の中で行われた意味というのはあるでしょうか。

ソンゴン：大学の教育プログラムのなかに「コミュニティアート」というのがあります。広い意味で、今回の作品もコミュニティアートに含まれる作品だと思いますが、「障がい」というはっきりとしたテーマを持って実施したのは今回が初めてでした。今回みたいな取り組みが、もし部分的にでも教育プログラムに入ったら、「意味」ということではなく「面白さ」という側面から見てとても可能性がありそうです、新しい試みになると思います。

中島：ありがとうございます。次にソンギョンさんお願いしてもいいですか？

演出家 チョン・ソンギョン氏(以下ソンギョン)：今回、いろいろ考えるようになりました。この作品は本当にいろんなことができる内容だと思います。他の戯曲もそうですが、特にこの作品は「どんな人たちと作るか」「どんな場所で上演するか」「誰が観に来てくれるか」によってとても違う意味を持つ作品だなと思います。この作品では「共同体による境界」というのが何回も言及されています。韓国公演では配役を決める時も、俳優と俳優じゃない人、障がいを持っている人と持っていない人、韓国人と韓国人じゃない人が一緒に参加してくれました。お客さんも障がい者の方・そうじゃない方、演劇専攻の人・そうじゃない人が混ざっていました。これから日本チームと一緒にこの作品を作らしたら、日本・韓国のどんな劇場で上演されるか、どんな人達が観に来てくれるか、によってとても違う意味を持つと思います。そこで皆さんと話し合っただけで何かを決めたり選択するときに、最良の選択を考えるのではなく、一つ一つの選択が、それぞれ全部違う作品になれる可能性を持っていると思います。

中島：同じ質問で、たんぼぼの家の佐藤さん藏元さんいかがでしょう。

演出助手 佐藤拓道氏(以下佐藤)：たんぼぼの家としては初めて台本のある演劇作品をやりました。稽古の時に、元々の台本のセリフから本人らしい言葉にニュアンスを変えながら置き換えてみて、それをメンバーが楽しんでくれたので、台本があってもそれを楽しむことができるということに新しい可能性を感じました。

演出助手 藏元徹平氏(以下藏元)：今回、映像で配信するのも初めてのことでした。上演の途中であらかじめ撮った映像を差し込んだりしたのですが、その中で発見がありました。例えば、ある

映像では車椅子の方の目線の位置にカメラを取り付けて撮影を行ったんですが、正面を向いている時は視線が傾いているんです。でも横を向いたら真っ直ぐになる。ということは、この人はいつも斜めに見えているのかもしれないな、とか。そういう身体性を、映像を使った方が感じられるのかもということを考えました。

中島：もりながさんはいかがでしょうか。

演出家 もりながまこと氏(以下もりなが)：セリフを色々組み替えている時に思っていたことが、台本を自分の考えを主張するために使わないように、台本の世界観を出すんだ、ということです。で、やっぱり演劇というのは、黙っていても言葉があるんですよね。その「黙ってても言葉になる」という事を意識しながら、繰り返しの稽古の中で台本にあるセリフを置き換えていました。

今回の日本編の上演は、台本にない配役がたくさんあったと思います。例えば「太陽」の役、「卵」の役をされた方がいました。お二人とも知的ハンディがある方で、決して軽い障がいではありません。世の中では居場所を見つけるのがとても難しい方です。私は彼らを、小道具のように使ったのではありません。「卵」「太陽」というのは、台本の中でも非常に意味のある固有名詞です。このお二人にとって、一般的に言う演技をするのはとても難しいことですが、彼らは何もわかっていないのではなく、役を担って、繰り返し繰り返し稽古の中で自分の「位置」というのを確認していくんですね。そしてお二人にこの役を演じてもらうことによって、言葉の持っている「意味」というのが、また違う形から見えてくるんです。卵、太陽という言葉が作品の中で持っている意味や、その言葉自体が持っている意味が、彼らが作品の中にいることによって感じられるようになる。これは演劇的にもとても刺激的なことですし、演劇が持つ特権的なことのように感じますし、社会的にも、このようなハンディを持っている方とどう共生していくのか、というヒントにもなると思います。そこは、韓国チームへも参考になればいいなと思ってやったところです。

中島：今の話、とても興味深いです。ヨンジュさんとソンギョンさんにもご意見いただけたらと思います。合わせてまずヨンジュさんに質問させて下さい。

今回同じ台本を使いながら、韓国と日本、違った形で上演が行われました。

ソンギョンさんの作品は、本当に若いのに、戯曲をしっかり知的に読み解いて、リーディングという形を使いながら、演劇の可能性というものを示してくれたと思います。

またもりながさんの作品は、演劇というのは通常、知的に考えられる・覚えられちゃうっていうのを前提として作られるんだけど、そういうのとは少し離れたアプローチで行われました。普通考え

ると、演劇っていうのは知的理解というのがないと生まれないようだけれども、でもそこにやっぱり、その人らしさ、存在、実存が浮かび上がってきて、また違った形で演劇が生まれていました。このタイプの違う二つの作品をご覧になって、どんなことをお感じになりましたか？

脚本家 イ・ヨンジュ氏(以下ヨンジュ)：まず、このプロジェクトが始まる時に私たちが会ってから、実際の稽古が始まって作品が出来るまでに結構間が空きました。それで、最初に私が思っていたこととはまた違うことを考えるようになりました。最初は障がいというテーマで、両国の障がいのある人が集まって、両国の演出家が一緒に演出することが決まっていた、ただキャストがどうなるかわからない状態でした。それで最初は(上演予定場所だった)鳥の劇場の特性を意識していました。行ったことのない劇場でしたが、地域の中で長い間活動してきた劇場というのがとても興味深く感じられました。韓国との交流も長く続いているので、韓国人にとってどういう劇場なのかとか、地域にとってどんな劇場なのか、それが知りたくて興味を持ちました。人によって、地域の中に劇場が存在することへの受け止め方は違うと思います。そのように、地域の中で一緒に暮らしていることについて自然と考えるようになって、それがまた障がいというテーマと繋がっていきました。障がい者も存在しているのに、何かの象徴としてとか、ただの対象として扱われるのではないか、という疑問を持つようになり、そういうものを物語にしたいと考えました。また日韓の関係は、いつも緊張感のある話題ですが、最近もっと関係が悪化したので、それもうまく利用できるんじゃないかなと思いました。

最初はどんな人たちが俳優として参加するのかわからなかったもので、一つ一つのエピソードを描こう、うまく起承転結のある作品にならなくてもいい、と思いました。演出家のお二人にも話しましたが、セリフをもっと単純化してもいいというような話はしたと思います。それはとても難しい作業だったと思います。日韓で同じ台本を使っているんですけど、どんな方向性にするかというのは、具体的な話はしなかったと思います。二つの作品は、それぞれ大事にしたポイントがうまく現れていてとてもいいと思いました。これから一緒に作品を作るにあたって、もう少し削除しても良い部分があったり、俳優の身体によって言葉にせずとも直感的に伝えられる部分がいっぱいあると思います。そうすることで、俳優や観客にとっても論理的に説明する台本ではなくて、例えばあるキーワードを提示することだったり、村に実体があって、誰かが実存していることを伝えられる作品になればいいなと思います。

中島：ありがとうございます。ソンギョンさん、先ほど太陽や卵を知覚障がいの方が演じたという話がありましたが、それに関して(演じてる様子を見て)お感じになったことはありますか？

ソンギョン：その「太陽」と「卵」という役が、日本編と韓国編の一番違うところだったと思います。例えば、卵が自分のスピードであちこち歩いているという場面がありますよね。韓国ではそれを照明で表現したんですけど、日本では役者がそれを表現していて、あれがどこまで演出されたスピードなのか、役者本人のスピードなんじゃないかなという風にいる想像して観ました。そこが日本編のとても魅力的なところだったと思います。今回の作品は一種の物語なんですけど、物語であることと同時に、演技している役者たちがその人本人として見えて、物語と実在が共存しているように感じました。太陽役、卵役の役者さんのおかげで、その部分ももっと大きくなったと思います。演劇を観ていると、俳優がすごく上手い演技をすると、逆に俳優自体の存在が薄くなってしまふことがあるんですが、それとは全く逆なことが見られて、このプロジェクトの目標ととても合っている演出だと思いました。

中島：今おっしゃっていただいたことは、もちろん演じている方の努力というのもあったと思いますし、現場のスタッフの皆さんの努力があって成り立ったところがあってすごく現場は大変だったんだろうなと思います。ちょっと現実的な話ですが、今回の日本編の上演は施設内で行われました。施設から出て演劇をするということは現実的に可能なんでしょうか。

佐藤：やっぱり施設でやったからこそ、あれだけの規模でみなさんが出演できたのかなと思います。施設外になると、その分ケアが必要になってくるので、かなり考えないといけないし最小限にしなきゃいけないかなと思います。特に車椅子の方はそのケアが必要になってきます。自立している人はケアの人が1人で対応できるので、少しは可能かなと思います。あとは基礎疾患のこともあります。本当に、施設内でやれたからこそ今回の人たちを舞台に上げることができたと思います。

中島：クオンさんも、今回のプロジェクトを行ってどんなことをお感じになったか、障がいのある人が参加することに伴って、練習や本番で難しさがあつたかどうかなど、教えていただけますか？

韓国芸術総合学校 クオン・ヨンスン氏(以下ヨンスン)：韓国の公演は、学校内の先生たちから推薦してもらったスタッフたちと、ソンギョンさんがオーディションで選んだ俳優たちと一緒に作業をしました。私は後でサポートする形でこの作品に参加しました。役者の中には車椅子の方もいましたが、稽古場に初めて

来てもらった時に、中に入ることができないくらいの段差があることに気がきました。トイレを使うのもとても不便でした。そういうことがあり、学校に対して作り直してくださいという抗議の動きもありました。今回はコロナがあり、少数のお客さんしか劇場に入れませんでした。もっと多くの方がこの作品を観にくるようになったら学校全体が障がいについて考える機会になるのではと思いました。

今回日本公演を配信を通して観ましたが、周りの多くの韓国人たちも一緒に観てくれました。韓国では今回の日本公演のように、重い障がいを持っている方々が演劇をする姿を観たことがなかったので、「こういうことができるのか」という可能性を深く感じました。

中島：ありがとうございます。今、来年度どのような形でやるのがいいのかを一生懸命考えています。次のステップはやはり、日本と韓国のチームが一緒になって作れたらと思っているんですが、来年度はまだ出来ないかもと少し不安も感じています。

ヨンスン：まずコロナが解決しないと、何かを決めることは難しいと思いますが、一緒になって何かを作るのがベストだとは思いますが、でももしそれが出来なかったら、次のステップはリーディング公演ではなく本公演を日本と韓国、それぞれ別々で作品を作るのはどうか、という話を今韓国でしています。今回の作品は学校内で上演して、それをオンラインで発表という形にしたんですが、観てくださった方達から「外で、一般の劇場ではやらないの？」という問合せがたくさんありました。学校としては、もし日本チームと一緒に作れなくても、ぜひこの作品を本公演として作りたいと考えています。

中島：私もできれば一緒に作りたいとは思っていますが、場合によってはそのような、日韓それぞれで本公演を作るようなこともあるかもしれません。

また、演劇とは少し離れますが、障がいのある人が社会の中でどのように扱われてきたかなどを、双方の歴史の専門家の人に喋ってもらったりして日韓で勉強会をするのも良いかなと思っています。上演だけじゃなく、関連事業としてシンポジウムなどの並行したイベントをやってもいいかもということを考えています。演出家のお二人にお聞きしたいんですけど、次のステップに向けてどんなふうに進めたいかなど、具体的なイメージや希望があればお聞かせいただけますか？

ソンギョン：私はこれから色々考える時間が必要かなと思っています。最初に鳥の劇場で上演するという話を聞いたときには、もし韓国人と日本人と一緒に出演することになったら、韓国人の俳優は全員異邦人になって、訪れた人のような存在になると

思いました。でも一度公演をやってみたら、それは非常に表面的な考え方だと感じました。今は、上演する場所が一番大事だと思っています。ある場所で、誰かがこの作品をみるために集まる、というのは、一つの共同体が生まれることだと思います。もし日韓チームと一緒に作ることができるなら、最初に何か絵を描いてからそれに合わせて作品を作るのではなく、場所やメンバーが決まったあと、私たちがここで何ができるかということを経験を掛けて話し合いながらゆっくり進めていきたいなと思います。**もりなが**：私も当面の希望としては、この作品を本公演として完成させて上演したいという気持ちはあります。もし日韓と一緒に作れるのであれば、ソンギョンさんと同じ意見ですが、こちらでレールを決めるのではなく、このプロジェクトに対して自分の自由意志で参加できる人と一緒に話し合っ作っていきたいです。この事業は一番初めに、そういう形でやりたいことで始まっていますので、今我々は完全にコロナ依存症みたいになってますけど(笑)、当初の、このプロジェクトに対する純粋な創作意欲は、変えずに持っておきたいと思っています。

中島：今私から言えることはとりあえず二つあります。一つは、今はプロジェクト2年目のことを考えていますが2年目で終了するものでもないだろうなと思っています。一応5年計画で考えているプロジェクトです。で、現実的にいうと、共同演出っていうのは恐らくあまり上手く行かない。だから、日韓のチームが混ざってやるとすると、どっちの演出家に主導権を持ってもらうかを決めた方がやはりいいと思うんです。そこで、来年で終わりではないっていうことがまた別の意味を持ってくるんじゃないかなと思っています。

それからもう一つ、台本については、ヨンジュさんの方で何らかのアップデートをしてもらってっていうのも、可能性としてはあるかなって思っています。

ヨンジュさんから、次のステップに向けて何かあれば聞かせてください。

ヨンジュ：演出家の方々がおっしゃったように、どんな方がどんな環境で作品を作ることになるかによって、もっと具体的な方向を決めることができるようになると思います。また俳優の個性が作品にとっても大きい影響を与えると思うので、どんな役者と一緒に作るかが重要なポイントになると思います。

同時に同じ場所で一緒に作業はできなかったが、それでも、最大限、共同ということに近づくよう、互いにできうる限りの努力をし、互いの言葉を真摯に受け止め、作品作りが行えたと感じる。画面越しではあったが、非常に意義のある時間を共有できたと感じる。顔を合わせて一緒に作品を作るのがさらに楽しみになった。

またさっきおっしゃった、シンポジウムなどの交流もとても大事になると思います。障がいや障がい芸術という分野は韓国でも研究されていて、最近日本の事例もたくさん紹介されている中で、たんぼぼの家のことも結構知られているのを知りました。ただ、実際どんな運営をされているかと、詳しい情報は知られていないので、そういう話が一緒にできたら研究している方にとっても貴重な機会になると思います。

今はコロナのせいで本当に先が見えないんですけど、もし一緒に作品を作れるようになれば、稽古の前に2週間くらいお互い集まって一緒に過ごしたりワークショップをする時間を取って、そのあと演出家と作家が集まって台本の修正・脚色の方向と一緒に話し合うのもいいんじゃないかなと思いました。

中島：今のお話にあったように、障がい者アートの現状を勉強してみるっていうのもいいかもしれませんね。ただ、皆さん充分ご承知と思うんですが、障がい者アートという言葉自体はもう無くないといけなものなんですよ。例えば絵画とか彫刻とか音楽とか、芸術分野を分ける呼び名の中で、障がいのある人がやる芸術っていう呼び名は全くナンセンスなんですよ。だから私たちはこういう活動を通じて、「障がい者アートだと思って見に来たけれども、人間のやる芸術なんだ」というのを、観た人に気づいてもらう、障がい者アートという言葉の裏にある差別をお客さんに気づいてもらわないといけなくと思っています。次のステップのやり方について、佐藤さんいかがでしょうか。

佐藤：今回はたんぼぼの家でできたっていうのがやはり大きいです。次にどう進むのかは、コロナのこともありますし、メンバーの体調がだいぶ変わってくることも予測されます。だから次は必ずしもたんぼぼの家のメンバーでなくても、当初考えていた「障がいのある人たちが自分で応募して、その人たち個人が参加する」という形で構わないと思っています。そういうふうな門戸を開いた方が有意義なのではないかなと思っていますし、そこにたんぼぼが何らかの形で参加できればそれもまた有意義かなと思います。

中島：ありがとうございます。次のステップについては、今皆さんがおっしゃっていただいた事を踏まえながら、また一緒に考えていけたらと思います。ではこれで、第一歩のステップは終わりということにさせて頂きたいと思います。本当に皆さんありがとうございました。

# 作品創作に関わったスタッフ・キャスト

## 日本編 演出家 일본편 연출가

もりながまこと 모리나가 마코토

演出ノート 연출의 글

私たちの「とある村」は障がいのある出演者のみで構成されています。身体の動きや声がとても微細な人や、字を読み取ることが得意でない人、そして発声がとてもゆっくりな人たちです。同じ身体の人は一人もいません。みんな違います。身体の在り方がそれだけ多様であるということは、それだけ“言葉がある”ということです。今、私たちの社会はコロナ禍にあります。世界のあらゆる社会システム・概念が脅かされています。演劇もまた、その表現の存在そのものが脅かされています。この状況の中で、私たちは、これからどのような概念で社会の仕組みを考え、生きていけばよいのか。このリーディング作品は、そのことのヒントのようなものについて、演劇という表現から疎外されている人たちからの演劇的提示です。それはわずかなともしびかもしれませんが、観る人ひとりひとりの表現する力、生きる力になりますように。本作品は、稽古を重ねて記録した音声や映像に、本番で演じられる出演者の演技を重ねながら、インターネットを通してライブ映像で観ていただきます。皆さんのところに光が届くことを願っています。

우리의 ‘어느 마을’은 장애인 출연자들만으로 구성되어 있습니다. 신체 움직임과 목소리가 아주 미미한 사람, 글 자 읽는 것을 어려워하는 사람 그리고 발성을 아주 천천히 하는 사람들입니다. 똑같은 몸을 가진 사람은 한 명도 없습니다. 다 다릅니다. 신체 상태가 다양하다는 것은 그만큼 다양한 ‘말이 있다’는 것입니다. 지금 우리 사회는 코로나 사태로 인해 세계의 모든 사회 시스템과 개념이 위협을 받고 있습니다. 또한 연극도 그 표현의 존재 자체 가 위협을 받고 있습니다. 이 상황 속에서 우리는 앞으로 어떤 개념을 가지고 사회 구조를 생각하며 살아가면 되는 걸까요? 이 리딩 공연은 그 힌트가 되어줄 것을 찾아, 연극이라는 표현에서 소외된 사람들이 보여드리는 연 극적 제시입니다. 이것은 아주 작은 등불일지도 모르지만 관람하시는 분들 한 사람 한 사람의 표현하는 힘, 삶의 힘이 되기를 바랍니다. 이 작품은 연습기간동안 기록한 음성과 영상에 공연 당일 출연자의 연기를 겹쳐서 인터 넷 라이브 영상으로 선보여 드립니다. 여러분께 빛이 닿기를 바라고 있습니다.

## 演出家 / もりながまこと Profile

1969年大阪府生まれ。近畿大学経営学科卒業。現在は劇団くらっぶの演出を担当しながら、精神障がい者や高齢者介護の現場に従事。（「劇団くらっぶ」は、奈良県を拠点に活動する、知的障がいのある人たちを中心とした創作演劇グループ）

16歳の時から演劇をはじめ、主に戯曲の執筆と演出を担当。大学在学中も継続して演劇を続け、1989年、20歳の時に劇団芽の気象(めぐみのきしょう)を旗揚げ。主宰。ひとり芝居に特化した演劇集団で、戯曲の執筆と演出を担当。

1996年頃、劇団は事実上の活動停止状態になるが、2000年頃より、民話や昔話を題材にした一人芝居をもりなが自身の自作自演で1年間発表し続ける。この頃に、障がいのある人や支援スタッフと出会い、共に演劇をつくることを模索し始める。同時に、知的障がい者の介護資格を取得し、グループホームなどの身体介護や移動支援の現場に従事し始める。

2004年、奈良県にある障がい者福祉施設において、デイサービスの一環としてはじまったパフォーマンスワークショップ(アクターズスクールくらっぶ)のリーダーとして招かれる。知的障がいのある人たちが参加し、これが、劇団くらっぶの原型になる。以下、すべての作品の構成と演出を担当する。

2005年2月、上記ワークショップの活動成果として、カフカの『掟の門』を大阪心齋橋ウイングフィールドにて公演。この公演の成功から、デイサービス終了後も、施設の方々が支援するかたちでもりながと知的障がいのある人たちとの演劇活動が継続されていく。

2006年4月、明治安田生命社会貢献プログラム「エイブルアート・オンステージ」参加作品として、大阪心齋橋ウイングフィールドにて、ゲーテの『ファウスト』を公演。この作品は、同年10月、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された、同フェスティバルにおいても公演され、新宿タイニイアリスにおいても、パフォーマンスユニットくらっぶ東京公演として、『掟の門』を公演した。

2009年12月 パフォーマンスユニットくらっぶとして、ベケットの『ゴドーを待ちながら』を公演(会場:シアターポポ)

2010年10月 『ゴドーを待ちながら』上演(鳥の演劇祭3)

2011年9月 『羅生門』上演(鳥の演劇祭4)

2012年2月 『ゴドーを待ちながら』上演(鹿の劇場)

8月 鹿児島県で開催された「LIBIDO展～本能としての衝動～」のオープニングパフォーマンスとして『ゴドーを待ちながら』を公演。(会場:かごしま県民交流センター)

2013年11月 『羅生門』上演(瀬戸際世界芸術祭)

2015年1月 岡山県で開催された「高梁の小さな芸術祭(たかはし福祉フォーラム2014)」において、『サイダージュース式もしくはCCレモン株式会社ゆきこ』を公演。この後、劇団くらっぶとして独立して活動していく。

2016年11月 劇団くらっぶのはじめての自主公演として『サイダージュース式ゆきこ会社2016』を上演(会場:施設Si-Ro三条)

2017年5月 プラトンの『饗宴』からヒントを得た『アンドロギュノスの憂鬱』上演(奈良演劇祭、会場:王寺町やわらぎ会館)

2018年6月 『アンドロギュノスの憂鬱2018』上演(奈良演劇祭 会場:王寺町やわらぎ会館)

2019年10月 『アンドロギュノスの憂鬱2019』上演(鳥の演劇祭12)

## 日本編

作/작: 이·콘जू 이연주

日本語翻訳/일본어 번역: 이·혼이 이홍이

演出/연출: もりながまこと 모리나가 마코토

演出助手/조연출: 佐藤拓道 사토 히로미치(社会福祉法人わたぼうしの会 たんぼぼの家・アートセンター HANAスタッフ)

藏元徹平 쿠라모토 텃페이(社会福祉法人わたぼうしの会 たんぼぼの家・アートセンター HANAスタッフ)

配役/배역: 劇場長1 극장장1 田井克典 타이 카츠노리

劇場長2 극장장2 山口広子 야마구치 히로코

劇場長3 극장장3 本田律子 혼다 리츠코

工場長 공장장 下津圭太郎 시모츠 케이타로

調理師 요리사 河野望 카와노 노조미

農夫 농부 たーやん 타아얀

獣医師 수의사 上埜英世 우에노 히데요

心理療士 심리치료사 大西照彦 오오니시 테루히코

卵・鶏 달걀/닭 河口彰吾 카와구치 쇼고

太陽 태양 清水要一 시미즈 요이치

声の出演 목소리 출연 北川憲一 키타가와 켄이치

友情出演 우정 출연

鶏 닭 (故)松本圭示 (고) 마츠모토 게이지 2015년 7월 31日永眠 2015년 7월 31일 영민

黒子 스태프

行方雄大 나메카와 유다이 菱川瑞姫 히시카와 미즈키 上園梨沙 우에조노 리사

佐藤拓道 사토 히로미치 藏元徹平 쿠라모토 텃페이

舞台スタッフ/무대 스태프

音響/음향: 島田達也 시마다 타츠야 河合陽三 카와이 요조(リバーフューズ合同会社)

照明/조명: 魚森理恵 우오모리 리에

照明助手/조명 어시스턴트: 木内ひとみ 키우치 히토

ライブ配信・映像制作/라이브 방송·영상 제작: 加藤文崇 카토 후미타카(レ・コンテ)

早川聡 하야카와 사토시 川崎麻耶 카와사키 마야

西口由梨 니시구치 유리

衣装製作/의상 제작: 是永ゆうこ 코레나가 유코(아트센터-HANA 아트센터 HANA 스태프 스태프)

松村賢二 마츠무라 켄지(아트센터-HANA 아트센터 HANA 멤버 멤버)

中村真由美 나카무라 마유미(아트센터-HANA 아트센터 HANA 멤버 멤버)

小道具製作/소도구 제작: 松谷可椰子 마츠타니 카야코(아트센터-HANA 아트센터 HANA 스태프 스태프)

東知恵里 아즈마 에리(아트센터-HANA 아트센터 HANA 스태프 스태프)

水田篤紀 미즈타 아츠키(아트센터-HANA 아트센터 HANA 멤버 멤버)

富丸風香 토미마루 후우카(아트센터-HANA 아트센터 HANA 멤버 멤버)

中野貴太 나카노 타카히로(아트센터-HANA 아트센터 HANA 멤버 멤버)

福岡左知子 후쿠오카 사치코(아트센터-HANA 아트센터 HANA 멤버 멤버)

手話通訳/수화통역: 一般社団法人 奈良県聴覚障害者協会 일반 사단 법인 나라현 시청각 장애자협회

通訳・翻訳/통역·번역: 田川智子 타가와 토모코

協力/협력: 社会福祉法人わたぼうしの家たんぽぽの家 사회복지법인 와타보우시노이에탄포포노이에

아트센터-HANA 아트센터 HANA

企画・制作/기획·제작: 鳥の劇場 새극장

## 한국편연출가 韓国編演出家

정성경 / チョン・ソンギョン

연출의 글 演出ノート

끊임없는 적응과 변화, 그것을 넘어서 진화까지. 날로 급변하는 세상에서 생존하기 위해 없어서는 안 될 말 같습니다.

니다. 또한 그러한 말들이 어떤 확고한 '목표'와 결합될 때, 실제로 존재하는 다양한 차이들을 극복하려 하거나 외면하기도 쉬워집니다. 그러다 문득 생각이 들었습니다. 한 사람 한 사람이 그 사람일 수는 있을까, 있는 그대로 살 수는 있을까. 그런

질문이 떠오를 즈음 <어느 마을>을 만났습니다. 당연하다고 생각했던 것들이 과연 당연

한지, 그렇지 않다면 무엇을 할 수 있는지 다시 한 번 생각해볼 수 있는 작업이었습니다. 함께 해주신 모든 분들 께 감사드립니다.

終わりのない「適応」と「変化」、そして、それを越えての「進化」。この言葉は、日々急変する世の中で生存するために、なくてはならない言葉であると思います。また、その言葉が、ある確かな「目標」と結びついた時は、現実に存在する様々な「差」を乗り越えようとする 것도、逆に無視したりする事も容易にできてしまいます。そこでふとある疑問が浮かびました。一人一人がその人らしく存在できるのだろうか。ありのまま生きられるのだろうか。ちょうどそんなことを考えていた時、「とある村」に出会いました。当たり前だと思っていたことが本当に当たり前なのか、もしそうでなければ何が出来るのか。改めて考えてみる機会となりました。一緒に参加して下さった皆さまに感謝申し上げます。

## 演出家 / チョン・ソンギョン Profile

1988年生まれ、ソウル出身。

劇団スペースモンキー主宰。

ソガン大学哲学科卒業。大学在学中、演劇サークル「ソガン演劇会」で演劇活動を始める。

韓国芸術総合学校演劇院演出科専門士課程在学中。(2017年から)

演劇やミュージカルなど舞台芸術の様々なジャンルに興味を持ち活動している演出家。

2016年、村上龍の小説『69』を脚色し、演劇『K大学付属高校の占拠事件』を演出。H-Star Festival演劇部門で金賞受賞。

2018年、サムスン半導体の産業災害の被害者、被害者の家族、労働組合弾圧の被害者、「半導体労働者たちの健康と人権を守る会“パノルリム(=四捨五入)”」の活動家と連帯し作ったドキュメンタリー演劇『銀河系帝国でランデビュー』を演出(@大学路・旅行者劇場)。ソウル文化財団最初芸術支援選定。

ミュージカル『ニジンスキー』演出(@韓国芸術総合学校芸術劇場中劇場)

ミュージカル『とんでもない青春』演出(@ソガン大学メリーホール小劇場)

2019年、劇団スペースモンキーを旗揚げ、ソウル文化財団ソウル青年芸術団選定(2019~2020年)

『銀河系帝国でランデビュー』再創作(@韓国芸術総合学校演劇院実験舞台)

ミュージカル『マリの昨日より特別な今日』演出(@韓国芸術総合学校演劇院実験舞台)

2020年、『銀河系帝国でランデビュー』ヨヌ舞台プロパガンダシリーズ選定、連帯現場の状況を反映し、再創作した作品を上演。(大学路ヨヌ小劇場)

## 韓国編

작 이연주 전문사 연극원 극작과 졸업 作 イ・ヨンジュ

연출 정성경 전문사 연극원 연출과 17 演出 チョン・ソンギョン

총괄 드라마터그·번역 이흥이 総括ドラマターグ/翻訳 イ・ホン이

출연 出演

강보람 칸·보람

강선자 칸·송자

강희철 칸·히철

김범진 홍선우 전문사 연극원 연기과 16 키ム·보ム진

Anupam Tripathi 전문사 연극원 연기과 18 アヌパム・トリパティ(Anupam Tripathi)

홍선우 전문사 연극원 연기과 16 ホン・ソヌ

수어통역 장진석 신선아 운영표 手話通訳 チャン・진석、신·선아、윤·영표

기획 정유경 전문사 무용원 예술경영과 19 企画 チョン・유경

드라마터그 김현지 전문사 연극원 연극학과 19 드라마터그 키ム·현지

배리어프리 매니저 강보름 전문사 연극원 연출과 18 バリアフリーマネージャー 칸·보름

무대디자인 김나은 예술사 연극원 무대미술과 졸업 舞台デザイン 키ム·나은

조명디자인 곽유진 예술사 연극원 무대미술과 졸업 照明デザイン クァク·유진

의상디자인 이예원 예술사 연극원 무대미술과 17 衣装デザイン 이·예원

소품디자인 정결 예술사 연극원 무대미술과 졸업 小道具デザイン チョン·결

음악감독 김진하 전문사 협동과정 음악극창작과 17 音楽監督 키ム·진하

무대감독 김지은 예술사 연극원 연출과 졸업 舞台監督 키ム·지은

조연출/영상 오퍼레이터 조수빈 예술사 연극원 연출과 17 演出助手/映像オペレーター チョ·수빈

그래픽디자인 이민지 예술사 무용원 이론과 예술경영전공 19 グラフィックデザイン 이·민지

사진 김솔 写真 키ム·솔

영상 플레이슈터 映像 プレイシューター

영상자막 장주희 映像字幕 チャン·주희

기술감독 임건수 技術監督 이ム·건수

조명감독 홍선화 照明監督 ホン·선화

음향감독 고태현 音響監督 코·태현

제작주임 송기선 制作主任 ソン·기선

제작감독 권연순 制作監督 クォン·연순

객석감독 정예림 예술사 연극원 연극학과 예술경영전공 19 客席監督 チョン·예림

음향오퍼레이터/셋업철거 김민지 외부 音響オペレーター/仕込み/バラシ 키ム·민지

조명/음향오퍼레이터 조연희 예술사 전통예술원 한국예술학과 18 照明/音響オペレーター チョ·연희

조명보조 하유미 예술사 연극원 무대미술과 19 照明アシスタント ハ·유미

조명보조 김윤지 예술사 연극원 무대미술과 19 照明アシスタント 키ム·윤지

조명보조 Sabina Ikhsan 예술사 연극원 무대미술과 19 照明アシスタント Sabina Ikhsan

조명보조/무대제작 정희주 예술사 연극원 무대미술과 19 照明アシスタント/舞台制作 チョン·희주

무대제작 문정우 예술사 연극원 무대미술과 19 舞台制作 ムン·정우

셋업철거 안소정 예술사 음악원 지휘과 합창지휘 18 仕込み/バラシ アン·소정

셋업철거 김지오 예술사 미술원 조형예술과 19 仕込み/バラシ 키ム·지오

셋업철거 권영은 예술사 연극원 연기과 17 仕込み/バラシ クォン·영은

셋업철거 원혜경 예술사 음악원 기악과 17 仕込み/バラシ ウォン·혜경

셋업철거 이라임 예술사 연극원 연출과 17 仕込み/バラシ 이·라임

셋업철거 정진웅 예술사 연극원 연출과 졸업 仕込み/バラシ チョン·진웅

배리어프리 모니터링 김민주 음악원 기악과 예술사 18 バリアフリーモニタリング 키ム·민주

배리어프리 모니터링 이충헌 음악원 기악과 예술사 20 バリアフリーモニタリング 이·충헌

배리어프리 모니터링 송수연 영상원 방송영상과 예술사 21 バリアフリーモニタリング 송·수연

주최·주관 한국예술종합학교 연극원 主催/主管 韓国芸術総合学校演劇院、鳥の劇場

제작 한국예술종합학교 연극원 制作 韓国芸術総合学校演劇院

후원 수어통역협동조합 後援 手話通訳協同組合

## 出演メンバー座談会

### 今回を振り返ってみてどうでしたか？

文責/篠田栞

2021/3/4、本番から2日後に、出演したメンバーと振り返り座談会を開催した。同メンバーで出演した「僕の生まれた日」(※2020年、たんぼぼの家の演劇プログラムとして創作・上演した作品)と比べ、「とある村」は、韓国の戯曲(自分たちの物語ではない、外国作品)を演じるという点で、大きな挑戦となった。稽古期間も短い中、本番、そして本番までのそれぞれの想いや、演劇プログラムに参加するということが自身にとってどういうことかを振り返ってもらった。

#### 田井) いやーよかった。7場のはじめ、山広(山口)さん連れて行くところが上手くいったと思う。

はっきりした関西弁でよく通る声で答えてくださったのは、田井さん。角刈りで立ち姿はピンとして、セリフに迷いが無い、存在感ある役者さんである。以前、演劇メンバーの発表を大阪にお客さんとして観に行き、「自分も演劇がやりたい!」と強く思い、今回がおめでたい初舞台だった。3/2の配信も、「よかった」と語るものの、特に言葉は、普段使い慣れないような台詞回しが多く、難しかったそう。田井さんは、演劇プログラムがない日も、担当スタッフを見つけては「こないだの俺の演技のあそこ、やりすぎてない?」とアドバイスを求め、セリフの間合いは絶対外さない。今回、1シーン、毎回田井さんがアドリブで言っているセリフがある。「舞台上立ったら、その瞬間、なんかこう、浮かんでくんねん」。田井さんの即興シーンは、名シーンのひとつ。

#### 山口) 3人で同じ役だから、空気をつくるのが難しかった。

いつもアップリケのついたお洒落な帽子に車椅子姿のヤマヒロ(山口広子)さん。演劇歴も長い。劇場長3名のうち、本田さんは、手話と表情で演技に参加する。田井さんとヤマヒロさんは、台詞を声にして演じるが、二人の話すスピードも声の大きさもタイミングも違う。ヤマヒロさんは、田井さんの言葉の方が自分の言葉よりも良いと感じる台詞は、田井さんに渡してしまうことにした。お客さんに、スムーズに演劇を見てもらうために、他のメンバー含めて全体がどのように見えるのかに気を払っているようだ。「りっちゃん(本田さん)とは一緒にやって長いけど、田井さんとは今回初めて。同じ台詞を同時に言っているのか悩んだ。」お気に入りのシーンは、7場の「村会議」の冒頭。3人の息がぴたりと合った。卵が割れてしまうラストシーン、共演の本田さんと目で合図して息を合わせて礼をした。人と一緒にやること、一緒につくっていくことが演劇の楽しさだそう。一緒に劇場長を演じた田井さんは「自分で積極的に動く人。ダンスがよかった」と評価する。

#### 本田) 手話のシーンが一番よかった。広子さんと目で演技をした。

本田さんの今回の見せ場は、ひとりで手話をするシーン。実は本番に台詞が抜けてしまうトラブルがあったが、臨機応変に対応した。楽しかったのは、長年一緒に活動する、ヤマヒロさんとの連携部分。同じ役柄を3人で演じる上で、呼吸を合わせるのが重要だった。「広子さんと目で合図をとって演技をした。目があってよかったと思う」。それを聞いたヤマヒロさん、「りっちゃんは、目と顔、表情で芝居をやれるところがすごい。(私は関西のおばちゃんて笑いを取りに行ってしまう)」と本田さんの演技を評価する。二人は互いに、普段から生活を共にしているからこそ一緒にできる演技があることを認め合っている様子。また、本田さんは、演劇中に、スタッフが自分の出番や台詞の終わりを知らせてくれることにも、安心して演技ができていたと語った。

#### 河口) 難しかった。卵って!

普段は、絵や陶芸、ダンス、野球、音楽など様々なプログラムに参加しているしょうごさん(河口彰吾)。卵役という、元の戯曲には登場しない役柄。しかし、たんぼぼの家のとある村にとっては、重要な役柄だった。真っ白な卵衣装に身を包み、靴下は「黄色」。妹さんが選んでくれたそうだ。自分の出演場面はタイミングが特に難しかったという。お気に入りシーンは、白い防護服に身を包んで卵を受け渡ししていくシーンと、「けんさんの『卵ない!』」。演出のもりながさんとは中学生の頃からの付き合い。「もりながさんが、次出るのはしょうごだよ、って言うってくれる。くらもん(藏元/演出助手)もあれやってこれやってって言うてる。佐藤さん(演出助手)がいるからよかった。」※けんさん/「とある村」の稽古途中でたんぼぼの家を退所されたメンバー。声のみ使用させてもらった。

#### 大西) 演劇の面白いところは「みんなで一緒に作ること」

演劇5年目の大西さん。ハリのある素敵な声で今回は心理療法士を演じた。とにかくセリフが長く、普段使わないような難しい言葉がたくさんあったことが大変だった、もっとうまく抑揚をつけたかったという。お気に入りシーンは、獣医師役の上埜英世さんとのアドリブの掛け合いのシーン。昔から一緒に過ごしてきた二人ならではの「昔の話」を披露。お互い言いたい放題で楽しかった。語り長年やってきた、英世さんに憧れるという。「僕なんかどうしても早く言うてしまうけど、もっと間が必要だと思った。」演劇プログラムに入る以前、長年、パソコンを使った作業をしてきた大西さんは、演劇の面白いところは「みんなで一緒に作ること」だという。自分の身体が思うようにはいかない葛藤を抱え、もっとこうできないのか?ということと戦いながら、まだ自分の身体を魅力的だとはなかなか思えない。「昔は障がい者は表舞台に出られなかった。時代がそういう風潮だったけど、障がい者の活動範囲が広がった今は、少しずつ、自分が表現することも好きになれてきた。やっとそういうように思えるようになってきた。」

#### 上埜) 自由に自分の表現ができること。選択できることがたんぼぼのいいところ

語り歴40年、演劇も大ベテランのひでよさん(上埜英世)は、他のメンバーからも憧れられる存在。絶妙な間合いと落ち着いたセリフまわし、表情の演技が素晴らしい。「語りと演劇は別の世界に思える。語りは自分の責任で一人でやらなければならないけど、演劇は失敗してもみんなに助けてもらえる。そういう面白さがいいなと思って演劇を始めた。」ベテランのひでよさんも、今回はセリフが長く、また、韓国の戯曲で普段使わないような台詞回しもあることなど、慣れないことが多くて不安だったという。ご自身の不安な心情と不安を抱える獣医師の役柄が一致していて、「この役割は難しすぎる、もう疲れた」という獣医師のセリフには特に気持ちが入った。長年一緒に過ごす共演者の大西さんに対して、「迫力があって心理療法士になりきっていた。」と語る。スタッフのサポートのもと、部屋にセリフを書き出した紙を張り出したりして、必死にセリフを覚えた。スタッフの工夫で車椅子につけた台詞表示のipadもやくにたったという。「アイパッドに集中してしまって、表情があまり作れなかった」「口には出してなかったけど、若手に緊張感がなかった」。他のメンバーの憧れの先輩として、スティックに場を引き締め、リードしている。

#### 清水) よかった。もっかいやってほしい

「またやりたい、すぐやろう。いつやんの?」と、インタビュー中も、なんどもご自身の登場シーンの動画を見せてくださった清水さん。太陽の被り物をして「おはよ〜朝やでえ〜」と通り過ぎる姿は見た人の脳裏に焼きつく。卵と太陽は、元々の戯曲には存在しない。メンバーから生まれた役が、稽古が進み演劇が出来上がっていくうちに、ひとつの重要な役として定着したものである。演じるシーンが多いわけではないが、スタッフいわく「清水さんはいつもずるい」。清水さんにしかできない重要なポジションがある。「演劇に入って、よかった。でも、次は(演出の人)、女の子にしてほしい。佐藤さんももりながさんも、おじさんやから」

#### 下津) 「卵ない、仕事ない、わあ〜」という台詞がうまくいえた。

今回、僕ができることは全部やった、という下津さん。一緒に演じたたーやんからは、「しもつくんは、声が裏返るから変なところが面白い、しゃべりかたも」と言われ「裏返してるつもりはないんやけどな」と答える。ゆっくりした声で上半身を大きく使いながら話をされる。「破水したての雌牛」「鯨の潮吹き」「風に煽られる羊」「象」のモノマネを鉄板ネタとし、下津さんにしかできない魅力的な表現をする。お気に入りのセリフは「卵ない、仕事ない」。この部分は、スタッフの佐藤さんが普段の下津さんの動きから、振り付けした動作が入っている。スタッフが自分のモノマネをしてくれるのも面白いと語った。

#### 河野) 面白かったけど、難しかった。

いつも自分たちのストーリーを演じているけれど、韓国の戯曲を演じるということが難しかったというぞ(河野)さん。「最初は台本渡されて、みんなでやるっていったけど、字が読めなかった。書いてる言葉と分かりにくかった。それでいつも通り、みんなでやっていったほうがいいんちゃうかなって考えていってくれたのがもりながさん。」演出の中で、元々の戯曲の本意からは外れないように、しかしメンバーが話しやすいような語調や例に置き換えていながら、演出がされていったことはのぞさんにとってはとてもやりやすかったそう。うまくいったセリフは「卵料理」について語るシーン。同じくらしい歳の女の人の柔らかい肌を想像しながらセリフを言ったそう。

#### たーやん) 寝てるシーンが気に入ってる。ほんまに眠たかったし

前回演じた「僕が生まれた日」が、これまででは一番うまくいったという。今回の役は難しかったそうだ。面白かったけど、特に野菜のシーンが難しかったそう。「大根、ブロッコリー、人参。ベジタリアンでござんすよ」というセリフ。ベジタリアンという言葉は普段使わない。「のぞ(河野)は声もテンションも高い。下津君は、いつも落ち着いている。僕が焦ってる時でも。」3人のコンビネーション、掛け合いの演技は、たーやんにとっても、心地よいものようだった。

## 観た人の感想

いいものを見せて貰いました。脚本は、現代を抽象的に具象した鋭角なメルヘンって感じで、とても躍動的な若さを感じるものでした。ところが役者さんたちの身体と声を通して現れてくる世界は、ものすごく重力があるスリリングなものに変容していく。その深さが面白かったです。ジョークが障害者あるあるだったので新鮮で素敵でした。卵を真ん中にみんなが叫ぶシーンはぶっ飛んでいて映像も声もメッチャロックでした！卵を噛み締めて語る「ありがとう」と言う言葉には、恐ろしい重みを感じました。命というものが全てに重みがある。一人一人の表情が伝えてくれて、泣きそうになりました。

配信映像観させていただきました。意欲作ですね。とても頼もしく感じました。次回は是非、生で拝見したく今から楽しみにしております。(近畿大学舞台芸術専攻教授)

初めての体験というか、なかなか集中力を必要としました。字幕なしで会場で見たらさらに大変だったかと。でも最後まで見て、なんだろう、不思議な満足感があります。(シルクスクリーン作家)

印象に残ったシーンは何個もありました。まず、工場長ら三人のシーン。コミカルで面白く何度も笑ってしまいました。個人的には彼らがいてくれるので内容がわかりやすくなって、説明的にも聞こえずに物語に入りこむことが出来ました。それぞれの人間性を土台にした演出に「凄い！」の一言でした。福祉施設で生活を共にしているからこそ引き出せる、そしてメンバーも出すことが出来る演技なんだろうな。車椅子を押す人や台本を小声でメンバーに伝えるのを隠さずに演出に取り入れているのも面白かったです。演劇という演じる空間に、役者の演じていない人間性や生活の部分がどんどん出てきて、なんだかそれがとても心地よかったです。この心地良さや醍醐味をもっといろんな人知ってもらいたいな〜、と見ていて思いました。今回の事業の目的である「よりよい共生社会の作り方」については、アフタートークのときにもりながさんがおっしゃっていた「今回の脚本の争いのところをメンバーが理解できなかった」ところが一つのキーワードになるのかなと。そんなメンバーが役者として自身の(障害を含めた)バックグラウンドを全開にして演じている姿は、とても興味深かったです。演劇やパフォーマンスはビジュアルアートとは違ってより直接的に障害を表現に組み込むことが出来るツールだと思っています。だからこそ、こんな演出手法や演技手法をより多くの人に見てもらいたいと思います。(たんぼぼの家アートディレクター)

【日本編の感想】配役の時点でかなり悩まれたのではないだろうか脚本・演出側の努力の結晶を感じた。たまご料理のTシャツや、太陽神の冠、その他いろいろのアートワークが流石だった。すべてが劇中に自然に溶け込んでいたと思う。なによりエンドロールが良かった。一人一人が卵焼きを自分のペースで飲み下し、「ありがとう」の言葉を述べる。このエンドロール自体がひとつのメッセージにも思えた。

【韓国編の感想】視覚障がいを持つ人のために、場面の展開ひとつひとつにナレーションが付いていた、バリアフリー精神を感じた。照明の演出で、スポットライトを小さく絞り、卵に見立てていたのには感銘した。ほかにも、コロナ下での判断であるのか、1名車いすの方でリモート出演だったキャストがいた。座面にタブレット端末。そして足の来るところにスピーカー。なんてクールなんだ、と思った。韓国やっぱりカッコいい…。

【日本編・韓国編に共通して思ったこと】 題目としてはリーディング公演でありながら、演者によっては開演はやくから熱が入り、演劇チーム・俳優団の素が出ておりソウルフルに感じた。(たんぼぼの家パートスタッフ)

稽古期間から本番までのメンバーの様子などを見ていて、これまでの演劇と違う流れなのもあり、本番ギリギリまで「難しい」「分からない」「疲れた」などという声が聞こえていました。ですが、メンバーさんそれぞれが愚痴ったり話すことで頑張る気持ちに切り替えておられて、「イヤやあ」と言うけど、辞める事を選ばずやり遂げ、すごいなと思いました。(たんぼぼの家パートスタッフ)

『生』と『死』を常日頃考えながら生きていますが、改めてそれを更に深く考えられました。演技については、皆さんであるからこそ滲み出せる無二の個性が台詞にとらわれることなく出ていたと思います。素晴らしい一言でした。特に田井さんの演劇での独特なオーラに惹き付けられました。ソロパフォーマンスを是非みてみたいと思いました。日本版で私が一番好きだったシーンは、エンディングです。皆さんが卵焼きを食すシーン。映像、音声ともずっと見ていられるようなエンディングでした。全てが響いたシーンでした。メンバーさんの稽古期間の様子としては、英世さんの、台詞が長いという事のプレッシャーがかなりのものだったなと思いました。でも、そのプレッシャーありきの素晴らしい作品になっているのだと思います。皆さん最高でした！お疲れ様でした、ありがとうございました。(たんぼぼの家パートスタッフ)

最初は清水さんの太陽がとてもユニークで、すごくコミカルな内容なのかと思っていましたが、観ていく内にこれは単純な物語ではないなと思って観ていました。卵の生産を通して生き物をロボットの様に扱ってはいけない(生きてるものを粗末に扱ってはいけない)、食材は生き物の命そのもの。有り難く頂きましょうという事を訴えているのかなと思いましたが、もっと深い意味も込められていそうな気もしました。私利私欲だけ(生産性や利益ばかり追求)を考えてはいけない、本当はしたくない仕事(この物語の場合、雛を雄と雌に振り分けて雄は殺す)もしなければいけない理不尽な世の中が辛かったり、とても生きづらい窮屈な世界を描いていて、それを観る側がどう感じるのか、どう捉えるのか問いかけている作品なのかなと思いました。お芝居を観ていて話しの内容が解りやすかったのは、農夫と料理長と工場長の場面でした。3人の掛け合いがとても面白かったです。物語の途中で、劇団長と劇団員さんの場面が変わった時や皆んなで踊り出した時などが、内容的にちょっと分かりにくかったのですが、でも舞台の中で車椅子のまま動き回ったり手話を覚えて披露したりなどされてて凄いなと思いました。本当にお疲れ様でした。色々と考えさせられる良い作品でした。(たんぼぼの家福祉ホームスタッフ)

難しいお話しでしたがジワジワと伝わってくるものがありました。たーやんさん河野さん下津さんの演技やセリフがコミカルで思いがけず笑ってしまいました。上埜さん大西さんのセリフや演技がとても良かったです。お二人の達観した感じがお芝居に良く合っていて、さすがだと思いました。また字幕がわかりやすくてとても良かったです。衣装や小物もよく考えられていてお話しの世界が表現されていたので、見始めて直ぐにお芝居の中に入れた気がします。(たんぼぼの家パートスタッフ)

【質問：障がい者の方の芸術活動を通しての社会参加に関して、お考えをお書きください】

今までは障害を持っている方の芸術作品を見たことがなくて、活動もあまり知らなかったけど、障害を持っている方にしかできない表現が沢山あって、それを逆に生かすことが出来るのが芸術だなと感じます。仕事が出来ないなど関係なく、人それぞれ得意不得意があって、色んな人が支え合って生きていると思うので、障害を持っている方だけが差別されるなどはおかしい事だなと、障害者の方自身が作品を作ることで、見た人に届くのではないかなと思いました。

【質問：今回の公演のライブ配信をご覧になった感想をお書きください】

障害を持っている人が本当にできるのかな？というのを見る前思っていたんですけど、一人一人が自分のセリフをちゃんと言っていて、しかもあんなに長いセリフを覚えていたのが本当にすごいなと思いました。最初は少し話の内容がわからなかったけど、だんだん分かるようになって、今の世界の状況であるコロナの話と繋がっているなと思いました。最後の方は本当に感動しました。普段普通に食べている卵は、ひとつの命であり、人間はそれらを殺して食べて生きている、でも人間が彼らのためにしてあげられることはあるのだろうかと考えていると、鶏という、卵たちの親になった育てることをしているんだなと感じました。そういう日常のことをすごい考えさせられる作品でした。考えるだけでなく、面白い場面も沢山あり、見てよかったなと思いました。(日本学生 ウェブアンケートより)

【質問：障がい者による芸術活動を通じた社会参画についてどうお考えですか？】

とても肯定的です。このような公演や活動が多くなれば良いと思っています。

【質問：今回のライブ配信を観ての感想をお書き下さい】

一生懸命準備されたということが伝わってきましたし、遠くにいますが日本の公演をとても近くで観ることができて良かったです。(韓国公演関係者・大学院生 ウェブアンケートより)